

# フランス人民戦線研究の新視点(一)

平 田 好 成

## 目 次

まえがき

一 社会運動及び労働組合運動史研究所雑誌第二号の内容と問題点

二 幾つかの代表的労作の内容と問題点

A Ch Ⅱ ブランの論稿

B S Ⅱ カーマノの論稿(以上本号)

C F Ⅱ カイエの論稿

D E Ⅱ ショードウルジュの論稿

E A Ⅰ M Ⅱ シェールの論稿

F 小 括

むすび

まえがき

前稿「フランス人民戦線研究の新動向」(『法学論集』第十五卷第一号(通巻第二十五号)一九七九年十月)の本文及び付記の所で摘記しておいたように、昨一九七九年一月十六日付けパリ発送の一刊行物が、三月上旬に筆者の手許に届いた。

その刊行物は、パリ第一大学に付設されている、社会運動及び労働組合運動史研究所 C R H M S S (旧労働組合運動史センター C H S) 雑誌第二号<sup>2)</sup>であった。この雑誌は、一、五〇〇部印刷され、その中一、二〇〇部近くが内外に送付されているようである。一のパラグラフでは、前稿付記で示した、雑誌第二号の目次に沿って、その内容を順次記す予定である。前稿に記した雑誌第一号の文献リストの追加分は、一九七七—一九七八年の一年間に当研究所に集められたもので、とくに、各地方、各地域ごとに整理された文献リストの中で、筆者の専攻テーマに関する一九三〇年代に限って見ても、それらはかなりの量に上っていることが解るであろう。二のパラグラフでは、雑誌第一号に収録されている論稿の中で、入手することの出来た五つのメモリアル<sup>3)</sup>について、その内容を記しかつ問題点を剔抉する予定である。この五つの論稿は、拙著『フランス人民戦線論史序説』(法律文化社 一九七七年十一月)の結論の部分を照射できる内容のものであろうと推測して選ばれた最初のものである。一九三〇年代のフランス人民戦線に関して、最近の地方史及び地域史研究の成果を十分に吸収し、かつそれらを理論的、法則的に整理することによって、底辺の広い曠野の部分を包摂したその全体像が描かれていかななくてはならないであろう。研究の拡散性と集中性とが要請される所以が、そこにある。拙著は、早い時期に、『フランス人民戦線政治史』もしくは『フランス人民戦線論』として発展させねばならないと考えている。

『史学雑誌』一九七八年の歴史学界—回顧と展望—(一九七九年五月)の中で論及されているように、「今後人民戦線史の研究は、共産党内の理論の分析や党内闘争の次元ではなく、労働者大衆の次元から捉え直していく作業が必要である」という指摘<sup>4)</sup>は、正鵠を得ているといえるが、今日の内外における研究状況からして、共産党内の理論の分析や党内闘争の次元においてもまだまだ説明されなければならない多くの問題点が残されており、さらに労働者大衆の次元においては極めて広大な沃野がそのままほとんど手付かずの状態に残されているといえよう。最近それらの沃野に対してかなりの切り込みが始まっていることは前稿でも述べたが、それはまだばらばらの状態であり、大衆レヴェルまで完全に下降し切っているということはできない。その大衆イメージにしても、必ずしもアクティヴな実像は浮かび出てきていないし、精

々が各種労働者大衆組織のトップリーダーシップやとくにサブリーダーシップを中心にやや鮮明な映像を映し出しているに過ぎない。労働者大衆組織といっても、それは、政党、労働組合、農民組合、協同組合、共済組合等々ヴァリエティに富んでおり、それらがまた、色々な勢力、集団、潮流、運動等に分かれて活動していた実態が、今後木目細かく追跡されていかねばならないであろう。

### 一 社会運動及び労働組合運動史研究所雑誌第二号の内容と問題点

雑誌第二号には、先ず、一九七八年度理事会の報告が載っている。同理事会は、一九七八年五月三十一日(水)の十七時から十九時三十分まで開かれた。出席者は、H. アルヴェイエ H. AHRWEILER (パリ第一大学理事長)、E. ラブルース E. LABROUSSE (ソルボンヌ名誉教授)ら十九名であった。研究所長 J. ドロズ J. DROZ が挨拶に立ち、理事会開催の遅延を謝し、しかし同研究所に寄せられた修士号論文や博士号論文の数を見れば研究所のヴァイタリティが明白であると述べ、さらにパリ第一大学に対して新しい研究所移転についての謝辞を呈した。同研究所は、パリ第一大学と同様に、多専門分野課程 pluridisciplinaire に大きな考慮を払っている。同時に、同研究所と国立学術研究所 CNRS との連繫方法についてもその努力が払われている。次いで、研究所幹事 J. シロー J. GIRAULT が、研究所規程案について説明を行った。これを巡って種々な議論が交わされ、その結果、後述するような新規程が晶化を見た。続いて、J. シローによる同研究所の研究活動報告が行われた。その主なものは、全国教員組合 SNI に対するアンケートや一九四四—一九四八年の労働組合中央組織が所蔵する文書に対するアンケート調査等である。国立学術研究所と各種研究組織との連絡及び予算措置や文書保存組織、例えば研究所内の保管所やその予算等について活発な意見が出された。J. シローはさらに、本研究所と他研究所との関係、研究所雑誌の出版、研究所内の蔵書、それに国内及び国際討論集会への参加問題に言及し、それらの場合の幾多の困難な条件についても論述した。本研究所と地方諸大学との関係が比較的良好なのに対し

て、パリ地区の幾つかの大学には本研究所に対する一定の過小評価が見られるという論及がなされた。他方、国民教育連盟 FEN、フランス民主労働同盟 C F D T 及び協同組合組織等を中心に、組合新聞や連盟会議報告書等の収集活動が進展しているという発言が行われた。続いて、J・ジローが、同研究所は現状のままでは止まるべきかそれとも一定の飛躍を考へるべきかという選択肢について述べ、もし後者の道を辿るのであれば、三つの方向が考へられる。すなわち、労働運動史、労働組合中央組織の要求、それに各大学間の専門分野相互の関係をそれぞれ拡充するという方向が示唆された。J・ドローズ所長は、はっきりと発展の方向を希望し、ただそのさいの管理上及び財政上の困難について言及した。研究方法に関して、さらに二、三の重要な発言がなされた。

研究所規程は、全八条から成り、前の規程より一か条増えている。新設の第一条は、一九六六年創設の労働組合運動史センターが、パリ第一大学の学術的監督の下で、社会運動及び労働組合運動史研究所に発展したことを規定している。第二条は、研究所の目的として、社会運動史、とりわけ労働組合運動史に関する研究を惹起し、発展させ、調整し、かつ援助することを掲げ、さらに、社会運動史に関するあらゆる種類の資料と同様に、労働者及び経営者組合の文書や刊行物の調査、保存及び開拓に努めることを謳っている。第三条は、研究所が理事会によって管理されることを規定している。理事会の議長は、パリ第一大学の理事長が当たる。理事会のメンバーは、関連領域においてパリ第一大学の歴史学教習研究課程 U E R で教えかつこの課程により指名された三名の名誉教授、教授もしくは助教、他の教習研究課程（政治科学、労働及び社会研究並びにパリ第一大学の労働社会科学研究所）で経済社会事件史もしくは制度史を教えかつこの課程により指名された三名の名誉教授、教授もしくは教授資格者、社会科学高等研究院の三名の研究理事、パリ第八大学で教えかつこの大学から指名された一名の名誉教授、教授もしくは助教、国立学術研究所の学術理事一名、フランス文書館理事会の代表一名、それに労働者、経営者及び協同組合中央組織の代表数名によって構成される。パリ第一大学所屬の幹事及び教育研究員は、理事会の会合に参加することができる。なお、理事会は、他の人物及び他大学の代表者をその活動に結

び付ける可能性を有している。第四条は、研究所長が、理事会に相談の後、パリ第一大学理事長によって提案され、学長決裁で任命されると規定している。第五条は、社会運動史の研究活動に関するフランス及び外国の学術諸組織との協力関係が確定した場合には、理事会は、その協力関係の様式について、三分の二の多数でその規則を作ることを謳っている。第六条は、研究所が、理事会の指令で、社会運動史のあらゆる研究者集団に参加すること、そして、集団研究のための研究活動グループが、その中に創設されるであろうと規定している。第七条は、すべての有資格研究者と同様に、フランス及び外国の学生たちは、社会運動史に関する資料の閲覧及び利用を、所長の許可の下で、研究所において承認されると規定している。最後に、第八条では、理事会で確定される研究所予算は、パリ第一大学教習研究課程の予算の中に包含されること、この課程の学術委員会が、研究所に支出する補助金の額を決定すること、さらに、この予算にはとくに収入金を含むこと、すなわち、研究所への特別の配慮によるパリ第一大学向けの贈与金及び遺贈金、出版物の売却代金並びに研究所向けのすべての他の財源等の各種補助金を含むことが規定されている。<sup>9)</sup>

次に、同研究所の一九七七一―一九七八年度活動報告が載せられている。まず、研究所の拡がりについて、同研究所は、他の研究所、例えば、大学社会主義研究事務局、第二次世界大戦史委員会並びにトロツキスト及び国際革命運動研究調査所との関係を深めた。さらに、同研究所は、パリ地区の各種研究所や図書館との会合に参加し、社会運動史資料センター(社会博物館、現代国際資料図書館、トロツキスト及び国際革命運動研究調査所、人間科学協会、フランス社会史研究所、大学社会主義研究事務局、モリス・ストレーズ研究所)の調整基盤を固めた。また、同研究所は、幾つかの国内及び国際会議にそれぞれ代表者を派遣した。(例えば、一九七八年二月三日、クルーズー都市共同体エコミュゼ学術会議、一九七八年三月一日、メキシコ労働運動歴史社会研究センター世界組織創設集會に加盟、一九七八年六月九日、モスクワでその世界組織会議、一九七八年九月十二―十六日、リンツ労働運動史国際会議、ロンドン労働運動史組織国際協会に加盟要求、一九七八年九月、パリでその会合)。研究所雑誌の配布を通して、同研究所と他のフランス及び外国センターとの協力関係が軌道に乗り始めた。次に、出版活動について、まず同研究

所は、『社会運動』Le Mouvement social 誌の編集に協力しており、同編集局に研究所の協力者を送り込んでいる。オーディール AUDIER 出版社は、研究論文のマイクロフィッシュ化に取り組んでおり、その最初のまとまったものが、未発表の二十三の論文を含め、J・シロー編『共産主義を中心として』“Autour du communisme”という論題で近く出版されることとなっている。その他に、ドイツ社会運動史及び反ユダヤ主義、無政府主義、労働者文化、植民地問題、労働組合運動、そして社会主義と共産主義というテーマで、この種の出版計画が進んでいる。ソルボンヌ出版部では、第三期課程の二つの博士論文、すなわち J.-L. Robert, *la scission syndicale (1914-1921)* と D. Cooper-Richer, *la Fédération nationale des mineurs avant 1914* の印刷交渉が進められているが、目下未刊行である。前述したように、同研究所雑誌第一号は、一、五〇〇部印刷されたが、この雑誌の送付以降、内外で刊行物の定期交換が進捗し、各研究所との定期的接触が進展し始めている。さらに、これも前述したように、同研究所は、マスペロ社から叢書を発刊する計画を立て、現在までに七冊が刊行されたが、その後この計画は断念されている。そして、その内容について目下反省が行われている。次に、討論集会に関して、先ず同研究所は、一九七八年十月六、七、八、九日、クルーズー Creusot で開催された「労働者記念」討論集会の後援団体となり、研究所の活動について、二つのレポートを提出した。一つは、一九三九年以前の教員労働組合運動についてのアンケートに関するレポートであり、もう一つは、一九四四―一九四八年の時期の労働組合文書についてのアンケートに関する報告書であった。同研究所は、一九七八年五月十七、十八日、一九六八年五月についての討論集会に参加するよう、労働総同盟から、予告を受けた。J・シローが、「労働運動史における一九六八年五月の地位と諸特徴」という題でレポートを提出したが、実際には、R・トランペ Rolande Trempe が彼の代理を務めた。また、同研究所は、ソ連邦科学アカデミー国際労働運動研究所の主催する、モスクワの討論集会（一九七八年六月七―九日）に代表を送った。J・シローが、同研究所内で実行された「研究の現況」についてレポートを提出した。さらに、同研究所は、前記したメキシコの会議及びリンツの会議へ参加する方針を立てた。最後に、同研究所は、一八四八年革命及び十九

世紀諸革命史協会、フランス社会史研究所、近代史協会及び『社会運動』誌と協力して、一九八一年秋に予定されている、「第一次世界大戦までのブランキーとブランキー主義者」というテーマでの討論集会の準備に参加した。

次に、一九七七―一九七八年の活動条件が述べられている。先ず、一九七七―一九七八年大学年度は、研究所にとって困難な年度であった。第一の困難は、財政資金の不足で、一九七七年五月以降、活動費は枯渇状態となり、研究所は、週八時間だけ辛うじてモニターで活動し、良くて週午後二回だけ開所するという状況であった。従って、研究予算も再評価されないままとなっている。第二の困難は、新しい事務所への移転から生まれ、その期間は、一九七七年十二月から翌年三月半ばまで続いた。その間、研究所は閉所されたが、著作物や定期刊行物の收拾整理等は可能であった。その後、条件が良好となり、新しい施設設備の下で、文書類等は、よりよく整頓されるようになっていく。また、研究所は、パリ第一大学歴史学教習課程担当教員の時間の割当によって機能している。しかも、多様な活動、すなわち、調査、出版、目録作成、他の研究者や研究所との関係並びに討論集会の組織及び参加という内容の活動が必要とされている。しかし、教員の時間は、最小限度を辛うじて維持しているに過ぎない。さらに新しい活動を付加するとすれば、何よりも研究者教員の時間の増加やとくに予算の増加を俟たなければならない。研究所はまた、独自の教育機能を有している。ここでは、二つのタイプの大学修了証が準備されている。例えば、研究所長J・ドローズは、社会運動史の専門研究課程修了証論文D E A と、ドイツ史及び社会運動史の修士号論文作成を指導している。その教育組織も、二年程前から難問を呈しており、とくに、予算縮減に伴う教育上及び学術上の不便が、新たな問題として提起されている。続いて、研究所の活動状況が述べられている。研究所は、図書館及び文書類の管理を行っており、とくに、新聞及び雑誌の収集に精力を集中し、無料でサーヴィスを行っている。また、労働組合中央組織や一定の政党及び組織関係について、その出版サーヴィスを実施している。さらに、協同組合や共済組合とのコンタクトを強めている。ところが、書籍購入の方は、一九七七年五月以降実行されていない。他方、E・ラブルースらによる各種の寄贈本及び活動家たちやその家族による文書類の寄託に関し、

その整理が実施されている。図書交換も進捗している。次いで、研究所は、厳格な意味での研究を実施しており、それは各方面に及んでいる。例えば、労働組合運動に関しては、教育組合運動と、一九四五年以降の労働組合運動の研究が進行中であり、そのための前記した二種類のアンケート調査が続行されている。他方、修士号論文等の調査が綿密に行われており、例えば、J・リジローは、一九七二年頃、そのエキスを集め、かつモリス・ストレーズ研究所 I M T と協力して、『両大戦間におけるフランス共産党の研究のための地域別参考文献』Bibliographie régionalisée pour une étude du Parti communiste français entre les deux guerres を出版した。しかし、まだ多くの研究機関が、こうした研究所の意向に対して沈黙を守っている。最後に、研究所の展望について言及が行われている。研究所は、目下現状維持か発展かの岐路に立っている。理事会等では、後者の希望が強いが、そのさい、研究の方向は、全社会運動に及ぶべきであり、とりわけ、「植民地」や「第三世界」部門や「社会主義諸国」部門の研究が開拓されるべきであり、また、本来の「労働組合運動」部門の強化が属望されている。その場合に、何はさておき、潤沢な予算措置が講じられる必要がある。⑩

次に、研究所の活動報告の付属資料として、先ず、研究所内で一九七七―一九七八年に準備された修士号論文の論題のリストが掲載されているが、その中で人民戦線に関係のある分は、次の通りである。

- Les femmes dans la Fédération de l'Habillement, 1914-1936.
- L'information sur la vie des syndicats dans la presse quotidienne de 1914 au lendemain de la seconde guerre mondiale.
- Les conventions collectives dans la presse parisienne (1936-1939).
- PC, CGTU, MOI: un exemple: les Juifs communistes dans la région parisienne dans l'entre-deux-guerres.
- La SFIO et l'Allemagne hitlérienne en 1938.
- L'analyse de la première guerre mondiale dans les publications du PCF de 1920 à 1947.



- Recherches sur l'évolution électorale de la SFIO et du PCF au XX<sup>e</sup> siècle dans l'Est et le Nord-est de la Région parisienne.
  - Le groupe communiste à l'Hotel de Ville de Paris entre-deux-guerres.
  - L'implantation du PC dans la région de Melun dans l'entre-deux-guerres.
  - L'implantation du PC dans la Sarthe entre les deux guerres.
  - Luttes de tendances dans le PC en 1923-1924.
  - Le PC dans l'Aube (1920-1933).
  - La SFIO vue à travers *l'Humanité* à partir du pacte d'unité d'action.
  - La Fédération de Paris du Parti Socialiste.
  - Le Consistoire israélite de Paris, 1930-1940.
  - La polémique de l'enseignement en Tunisie (1936-1938).
  - L'insulte politique à travers les grands quotidiens de 1934 au Front populaire.
- 次に、一九三七—一九七八年に準備された専門研究課程修了証論文の論題の中、人民戦線関係の分は、次の通りである。
- La Fédération unitaire de l'enseignement (1922-1935).
  - L'interprétation de la première guerre mondiale dans les publications du PCF de 1920 à 1947.
  - Le Trotskysme et la question nationale.
  - La législation du travail sous la Troisième République.
  - Syndicalisme national en Algérie des origines à 1954.
  - Syndicalisme des Instituteurs (1934-1940).

さらに、ジードローズの指導の下で一九七七一―一九七八年に登録された国家博士論文リストの中、人民戦線関係のものは、次の論文である。

—PESCHANSKI (D.): Le PC de 1938 à 1941.

また、教授ジードローズの指導の下で一九七七一―一九七八年に登録された第三期博士論文リストの中、人民戦線関係のものは、次の二つである。

—JOURDAIN (D.): La SFIO et la jeunesse.

—LE BARS(L.): La Fédération unitaire de l'Enseignement au sein de la CGTU.<sup>(5)</sup>

続いて、一九七七一―一九七八年の財政報告が載っている。先ず、研究費は、一九七七年が五、〇〇〇フランであったが、赤字を約一、四〇〇フラン出している。一九七八年も五、〇〇〇フランで研究所の模様替え、文書目録の作成、雑誌のタイプ印刷、調査活動は、ほとんど実施できない状態であった。研究活動も、前半期の一―六月だけで終り、補正予算がつかない限り、新しい研究は不可能の状態である。次に、活動費は、一九七七年に七、〇〇〇フラン組まれていたのを、学長決裁で三、五〇〇フランに減額したため、前述したように同年五月以降は活動ができない状態であった。一九七八年も七、〇〇〇フランの枠が三、五〇〇フランに落とされ、同年五月までの活動しか展望できない状態である。フルに活動するための必要経費を見積もると、それは、二四、〇〇〇フランという額に上る。<sup>(6)</sup>

その後、メキシコ大会の報告が載っている。一九七八年二月二十七日(月)から三月三日(月)まで、メキシコで、労働運動歴史社会研究世界組織 AMCEHSMO の創立大会が開催された。メキシコの研究所の招聘に応じて、イタリア、アイルランド、ポーランド、ソ連邦、ブルガリア、アメリカ合衆国、スペイン、ドイツ民主共和国、フランス、それにメキシコの代表が参加した。フランスの代表は、M ヲダヴィド Marcel Davidら三人であった。最初の二日間、各国の代表は、それぞれ自国の労働運動史の研究状況について報告を行った。ソ連邦の代表は、労働及び労働者階級の歴

史を究明するには、専門分野間の多くの側面を明らかにすべきであり、とくに知的勤労者の影響力の発展を跡付けるべきであると強調した。多専門間の研究に先鞭を付けたのは、一八四〇年におけるF・エンゲルスであったし、一九一八年にロシアでは、すでにこうした視点から国内、国際労働運動に関する社会的経済的資料の調査を実施したという例を提示した。メキシコは、労働者階級の発展の多くの側面が最も良く研究されている国である。この種の研究には、二つの主要な水準、すなわち、社会的理論の水準と勤労者運動それ自身の水準とを究める必要があることが強調された。スペインの代表は、スペインの労働運動研究について、フランコ以後は資料接近が可能となり、従って、内戦以降の研究が大幅に可能となった点を強調した。フランスの代表は、フランスにおいて労働運動史に関する研究は、諸大学、とりわけ、パリ第一大学、リール第三大学、トゥールーズ大学、リオン大学、ブザンソン大学、グルノーブル大学、ナンシー大学、パリ第八大学(ヴァンサンヌ)、パリ第七大学(ジュシュー)及びパリ第十大学(ナンテール)で実施されており、この外にも、研究所(センター)、政党や労組、その他の研究機関や雑誌で幅広く実施されていると報告した。ただ、研究所が分散しており、その資金が極端に貧弱な点がとくに指摘された。フランスにおける労働運動関係の史料編集の発展については、『社会運動』誌一〇〇号(一九七七年七月九月合併号)に詳しく載っている。とりわけ、社会史研究所及び労働組合運動史センターの活動が特筆される。この会議では、引き続き研究所の計画等について活発な意見の交換があり、とくに、労働用語辞典の作成、多専門分野間の協力並びに資料収集家と研究者との協力関係等について有意義な意見が交わされた。最後に、会議は、この世界組織の規程を決め、事務局を選出して終幕した。<sup>18)</sup>

第二シリーズで、一九七三年以降、労働組合運動史センターに提出された、高等研究課程修了証論文DES、修士号論文(メモアール)及び博士論文(テーズ)のリストの補足分で、人民戦線と関連のあるものは、次の通りである。ただし、このリストは、一九七八年五月十九日で停止となっている。

セクシヨン二、フランス。

政治史、一九二八—一九三九年。

-DELAHAYE (Danièle): Le problème de la sécurité en France pendant la période Locarno-Thoiry, vu par la presse de gauche. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz, 1977, 239 p.)

-GAUDU (François): Le PCF et la défense nationale; ses rapports avec l'Internationale communiste sur ce point, 1930-1940; (Mémoire, Paris VII, Perrot, 1975, 83 p.)

-LAFON (François): Les socialistes français et le pacte franco-soviétique du 2 mai 1935. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz, 100 p. plus nombreuses annexes.)

-TANFOUS (Asiza Ben): Le Front populaire et la presse tunisienne juin 1936-octobre 1937. (DES, Tunis, 1967, 157 p.)

-TARTAKOWSKY (Danièle): Ecoles et éditions communistes, 1921-1933; Essai sur la formation des cadres du PCF. (Thèse 3<sup>e</sup> cycle, Paris VIII, Cl. Willard, 1977, 520 p.)

-VARON (Eric): Les principaux signataires du "Manifeste des seize" et la revue *Pius Lon*, 1925-1930. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz-Maitron, 1977, 188 p.)

労働組合運動、一九一四—一九三九年。

-CHUSSEAU (Yves): Le mouvement ouvrier à Nantes de 1936 à août 1939; (Mémoire de maîtrise, Nantes, Fierrasse, 1977, 146 p.)

-LOUCU (Gérard): Le bulletin mensuel de la section d'Ille et Vilaine du Syndicat national des Instituteurs publics de France et des colonies, 1926-1940. (Mémoire de maîtrise, Rennes, Denis, 1975, 105 p.)

文明史、宗教。

- HIRSCH (Catherine): La communauté juive française et la résistance à l'assimilation dans les années trente. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz, 1977, 172 p.)  
文明史、文化運動。
- DELAGE (Christian): Le cinéma à l'époque du Front populaire (recherches sur les relations entre le cinéma français et l'histoire entre 1935 et 1938 à partir de huit grands quotidiens). (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz-Rebérioux-Ory, 1977, 266 p.)
- DUMONT (M.): RICHARD (G.): VIRIEUX (D.): La chanson à succès dans les années trente à Paris. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz, 1977, 186 p.)
- PONS (Frédéric): Esthétique et politique (les intellectuels fascistes français et le cinéma: Rebaret, Brasi-lach, Bardèche), 1930-1945. (Mémoire de maîtrise, Paris I, Droz, 1977, 318 p.)  
セクシヨニシテ世界。  
国際労働運動史。
- AL CHARIF (Maher): L'Internationale communiste et la Palestine, 1919-1939. (Thèse 3<sup>e</sup> cycle, Paris I, Droz-Gallissot, 1977, 414 p. plus annexes.)<sup>(4)</sup>  
次いで、地域研究のリサーチマップが行われている。前掲と同様、人民戦線期に関連の深いものをピックアップして紹介する。
- 一九七三年以前の田付のなごみ、エクス・マルセイユ、AIX-MARSEILLE 地域。  
1、ヴァーナル Le Var 県。
- REBOA-GONZALES (S.): L'opinion publique varoise et la guerre civile d'Espagne (1936-1939).

-RENARD (J.): La démographie et les structures socio-professionnelles à Brignolles de 1836 à 1936.  
 17 社会と轉生。

-SEGAL (P.): 6 février 1934 à Marseille.

-GELLI (J.): La presse niçoise et les événements du 6 février 1934.

-COTY (R.): *La Revue des deux Mondes* et les dictatures fascistes de 1919 à 1939.

-GRUKER (M.): La presse marseillaise et la crise de Munich.

-JARS (N.): La presse marseillaise et Hitler.

-DEL CAILO (J.M.): Le fascisme. Son avènement vu par *Le Petit Marseillais*.

-BENTOSELLA (P.): Les événements d'Espagne et l'opinion marseillaise.

-BOUISSON (B.): Le mouvement pacifiste à Marseille entre 1932 et 1935.

-CAMPOLIA: *Le Petit Marseillais* 1928-1932.

-BERETS (P.): Les relations franco-allemandes dans *Le Petit Marseillais*.

-VAHUTIN (M.): L'opinion du *Petit Marseillais* sur l'Union Soviétique de 1924 à 1928.

-BOLDY (N.): La journée du 6 février 1934 vue par quelques journaux marseillais.

-BRIAND (J.F.): Maurice Barrès et la Provence.

-SCHWING (M.): La Russie soviétique devant la presse quotidienne marseillaise; *Petit Marseillais*, *Petit Provençal*, 1932-1939.

-CASELLI (E.): Les sympathies fascistes du *Petit Marseillais* 1934-1938.

-BORZACCHI (J.): Le syndicalisme agricole dans les Bouches du Rhône.

- REY et PERES (M.): L'Union des Syndicats agricoles des Alpes et de Provence.
- MOULINAUD (D.): Le Parti communiste à Marseille (1919-1925).
- MOUSTIER (H.): Le Parti communiste à Marseille de 1936 à 1939, à travers et devant la presse marseillaise.
- 三ノロコトノクローネ・ズンフェーネ Provence-Côte d'Azur 戦後史観の発展と継承
- MEZADE (B.): Le Front populaire à travers la presse marseillaise.
- MOULINARD (D.): Le Parti communiste à Marseille. Naissance et débuts (1919-1925).
- AGOSTINO (M.D.): L'implantation socialiste à Marseille sous le Front populaire.
- PANÉ (J.) et SANJUAN (D.): Istres: étude sociale et politique depuis 1870.
- TEISSEORE (G.): Evolution socio-politique de l'électorat ciotaden sous la 3ème République.
- DELISLE (M.P.): Etude électorale et sociologique de quartier Saint-Pierre de 1880 à 1971.
- BIANCHI (D.): Etude socio-politique des quartiers de Bonneveine et de Montredon depuis 1870.
- ORGEAS (A.): Sociologie électorale d'un canton des Bouches du Rhône; le canton de Roquevaire depuis 1870.
- ノクムレ BREST 一九六八—一九七四年。
- KAMP (Gérald): Les élections législatives dans la première circonscription de Morlaix en 1932 et 1936.
- LEGOR (François): Les ouvriers à Brest. Essai d'histoire économique.
- カーン CAEN 一ノヤ一—一ノヤ四年。
- TATAR (Joël): Le mouvement ouvrier dans les industries textiles du Calvados, 1884-1939. (1971)

読  
鑑  
-FULLANA (Jean-Mmanuel): La gauche dans le Calvados, 1892-1928. (1971)  
-MALLEJAC (Jean-Paul): La gauche et son électorat dans la Sarthe sous la 3<sup>ème</sup> République, 1876-1936. (1971)

-MAZOU (Sadou): Mouvement ouvrier et élections dans le Calvados, 1935-1939. (1972)

-ROQUEBERT (Josiane): Les cheminots calvadois, 1891-1939. (1973)

-SIMON (Micheline): Le mouvement ouvrier dans le Calvados, 1919-1931. (1973)

-GREYON (Jean): Etude démographique du monde ouvrier dans la banlieue caennaise, 1911-1936. (1974)

-GRABINSKI (Liliane): Démographie et structures professionnelles du monde ouvrier, région de Caen, Dives sur mer, 1851-1936. (1974)

-GIRARDEAU (Daniel): La mine et les mineurs à Saint Rémy sur Orne et Soumont Potigny: étude économique, démographique et sociale, 1870-1936. (1975)

シムンギンノートキホン CLERMONT-FERRAND 一九七六年発行。

-BARBECOT (M.): Les élections législatives dans la circonscription de Riom-Montagne, 1902-1936.

-BLANCHER (Denis): La droite dans le département de l'Allier de 1936 à 1939. (1974)

-BLANQUET: Le syndicalisme bourbonnais et les grands affrontements de classe (des journées de février 1934 à la grève générale du 30 novembre 1938). (1974)

-BOLLON (Georges): *Le Montieur* du Puy de Dôme sous le gouvernement Daladier (9 avril 1938-4 septembre 1939).

-CHAUCHAT (Auguste): Géographie électorale de l'arrondissement d'Issouire. (1950)



- COL (M.): Mines et mineurs en Haute-Loire entre les deux guerres (1914-1945). (1971)
- CORBIN (Alain): Prélude au Front populaire (opinion publique dans la Haute Vienne: février 1934-mai 1936). (1968)
- FAUJ (André): Riom és Montagne et son canton, 1870-1930.
- FAURE (Jean-Pierre): L'usine et les ouvriers d'Imphy, 1850-1930. (1972/1973)
- FRENEA (Martine): La mine et les mineurs de Saint Eloy de 1914-1940. (1974)
- GRADECK (D.): *L'Avenir du plateau central* sous le gouvernement Daladier (1er avril 1938-4 septembre 1939). (1973/1974)
- GRI MONPREZ (Yves): La Montagne et le gouvernement Daladier jusqu'au déclenchement de la seconde guerre mondiale. (1974)
- LAMOUCHE (Martine): Marx Dormoy de 1888 à 1935. (1971 / 1972)
- MANOUSSI (Jean-Loup): *La Montagne*, quotidien régional des gauches. Le Front populaire au pouvoir (1936-1938). (1969/1970)
- MARCLOT: La vie politique à Riom de 1936 à 1946. (1972)
- OLIVEIRA(A.De): Les cantons de Thiers et de Saint Rémy de 1919 à 1939. (1971/1972)
- PAYS(Michel): Le syndicalisme agricole en Haute Loire de 1919 à 1939. (1975)
- RESSORT(Bernard): Le département du Puy de Dôme d'avril 1938 à septembre 1939 (aspects économiques et sociaux). (1976/1977)
- VAUDON (Jean-Pierre): Le Parti communiste aux élections dans les arrondissements d'Issoire et de Thiers.

1920-1936. (1970)

ディジョンの 1960-1973年。

-PALAU (Pierre): La loi des 40 heures et l'institution des congés payés en 1936 vues par la presse dijonnaise. (1964)

-COURVOISIER (Claude): Un quotidien de province: *Le Bien public* (Dijon, de 1868 à nos jours). (1964)

-CASPAR (Odile): La population dijonnaise depuis 1914. (1965)

-ELKAIM (Jean): La politique financière du second gouvernement Laval (7 juin 1935-22 janvier 1936) et la presse dijonnaise. (1965)

-BEGUIN (Bernadette): La grève de mai-juin 1936 vue par la presse dijonnaise. (1967)

-BELORGEY (Madeleine): L'évolution de la population agricole en Côte d'Or entre les deux guerres: l'exode rural. (1967)

-JUILLERON (Danielle): Les grèves et les mesures sociales de mai-juin 1936 vues par la presse de Chalon sur Saône. (1967)

-NOMPAIN (Alith): Les étrangers en Côte d'Or de 1931 à 1936. (1967)

-RAZAFIMANOMBEY (Jacqueline): La politique agricole du Front populaire vue la presse dijonnaise en 1936 et en 1937. (1967)

-JOSEPH (Jean-Marie): La presse quotidienne dijonnaise et l'Allemagne nazie. (1968)

-LEVADOUX (Claude): La presse dijonnaise face à Munich. (1969)

-ROUYER (Jacques): Les socialistes et les élections cantonales de 1934 et 1937 en Côte d'Or. (1970)

- CHICOUARO (Alain): Le mouvement trotskyste en France de 1933 à 1936. (1971)
- DEGOIS (Philippe): Le Front populaire à Troyes. (1972)
- MARNIER (Pierre): Evolution politique du canton de Flavigny-Venarey-Les-Laumes de 1885 à 1939. (1972)
- PETITDEMANGE (Patrick): L'URSS dans la presse dijonnaise de 1935 à 1938. (1972)
- グノーブル GRENoble' 一九六八—一九七六年。
- MIEGE (Robert): Etude de l'évolution socio-professionnelle des chefs lieux de canton savoyards (Chambéry et Aix-les-Bainsexceptés), de 1860 à 1936. (1968)
- COISSIEU (Anne-Marie): L'Italie de 1935 à 1940 vue à travers la presse dauphinoise. (1969)
- LAVELLE (Pierre): Une revue antifasciste: *Repubblica*, 1931-1933. (1969)
- MARESCHAL (Christian): Le socialisme en Savoie de 1905 à 1939. (1969)
- PLANTE (Jacques): L'Italie fasciste vue par la presse dauphinoise (janvier 1926-août 1934): (1969)
- POULET (Berrad): Les origines du Parti communiste dans l'Isère. (1969)
- CHOLLOUX (Joël): Le PCF à travers *Le Travailleur alpin*, d'octobre 1928 à février 1933. (1970)
- GARNIER (Georges): Le problème de l'unité ouvrière dans les Asturies à la veille de la révolution d'octobre 1934 (à travers la presse régionale). (1970)
- GENOUIAZ (Jean-Michel): La montée du Front populaire vue à travers *Le petit Dauphinois*, 1934-1936. (1970)
- LE NEST (Marie-Louise) née LE BRIS: Evolution et aspects de la ganterie à Grenoble depuis ses origines à nos jours. (1970)

- SAVIGNON (Joëlle): Les ouvriers du textile à Vienne, 1929-1932. (1970)
- JUQUEL (Eliane): Biographies des dirigeants communistes de l'Isère entre les deux guerres. (1971)
- MOLLIEZ-CARROZ (S.): Ulgine au XXème siècle. (1971)
- PERRIN-VATToux (M.), REGACHE (B.): Le grand patronat industriel dans l'agglomération grenobloise.
- TORGUE (Michel): Etude biographique de militants socialistes 1918-1940. (1971)
- VERLIHAC (Noëlle): La grève des mineurs de la Mure, 1936. (1971)
- BERRUX (Bernard): Quelques aspects de l'évolution économique de Chambéry de 1919 à 1939. (1972)
- BOUCHET (Gérard): Le parti communiste dans l'Isère de 1923 à 1925. (1972)
- COSTAZ (Emile): La réunification syndicale dans l'Isère: 1934-1936. (1972)
- DUMOULIN (Daniel): La OGT dans l'Isère. (1972)
- FEGUEUX (Claude, née PENNET): Histoire de la cimenterie de Grenoble et de ses environs des origines à 1939. (1972)
- MACHU (Bernard): La droite et l'extrême-droite dans le département de l'Isère. (1972)
- MATHIEU (Pierre-Paul): L'urbanisme grenoblois de l'entre-deux-guerres. (1972)
- ETIEVENT (Michel): Le mouvement ouvrier en Savoie, 1936-1946. Un exemple original: l'industrie électrochimique et électrometallurgique de Tarentaise. (1973)
- TEYSSERE (Geneviève): Les origines du communisme dans l'Isère. (1973)
- CHAMPION (Pierre): Biographies de militants communistes de l'Isère. (1973)
- BILLON (Danielle): Les grèves de 1938 dans le département de l'Isère. (1973)

- SIMMONET (Jacques): La grève du textile à Vienne en 1932. (1974)
- DEPRES (Robert): De Munich à Vichy: le Parti communiste français dans l'Isère en 1938-39-40. (1974)
- REVIL BAUDARD LINOSSIER (Jacqueline): Les communistes dans la clandestinité à Saint-Etienne, 1939-1944. (1975)
- MONNIER (Elisabeth): Les Syndicats libres féminins de l'Isère, 1919-1931. (1975)
- FROSSATI (Yassu): L'immigration italienne dans le département de l'Isère: étude démographique et socio-économique de 1851 à 1939. (1976)
- GIARO(Thérèse): La Mutualité dans l'Isère de 1898 à 1968. (1976)
- TERRONE (Patrice): La SFIO dans l'Isère, 1934-1938. (1976)
- VIGNE (Bernard): Les origines du Parti communiste français 1914-1924. De l'Union sacrée au Bloc ouvrier et paysan, la naissance de la Fédération communiste du Gard. (1970)  
リーネ LILLE' 一九六八—一九七六年。
- POCQUET (Alain): Biographies des militants PCF et CGTU, 1920-1940. (1968)
- ROETS (François-Xavier): Le mouvement ouvrier français à Roubaix-Tourcoing de 1914 à la IVème République: notices biographiques des militants (hormis les militants du Parti communiste et de la CGTU). (1968)
- SARACCA (Pierre); BONNOT (Maurice); DOZIER (François); VERMULIEN (Jean-Paul): Quelques aspects de la crise économique des années 1930-1935 dans le Nord. (1969)
- VERVISH (Mary-Annick): Les classes populaires à Boulogne: décors et style de vie, niveaux de vie et mouvements sociaux, d'après la presse, 1930-1935. (1969)

編

-PIOT (Francine): Classes populaires, décors, style de vie, niveaux de vie et mouvements sociaux, à Lille de 1930 à 1935, d'après l'étude de la presse locale. (1969)

鑑

-MARTEIN (Annick): Conditions de vie, décors de vie, genre de vie des classes populaires à Amiens entre 1930 et 1935 au travers de la presse. (1969)

-BERTHE-VERHILLE (Martine): La vie des classes populaires calaisiennes de 1935 à 1939 à travers un quotidien local. (1970)

-DALLE (Françoise): Les classes populaires de Calais de 1930 à 1935: décors et styles de vie, niveaux de vie et mouvements sociaux, d'après la presse. (1970)

-BOUVRY (Jean): La vie quotidienne des ouvriers de Maubeuge et de ses faubourgs pendant la crise des années 1930 (1929-1937). (1970)

-FOREAUX-BOUDRY (Claudine): MARTEL-BERTHELOT (Marie-Lise): Les grèves à Lille-Roubaix-Tourcoing, 1919-1935. (1970)

-SUEUR (Marc): Quelques aspects de l'étude d'un groupe de pression: les associations d'Anciens Combattants dans le département du Nord, 1919-1939. (1971)

-FAUVET (Jean): Vie quotidienne des mineurs de la Compagnie de Béthune pendant l'entre-deux-guerres, d'après la presse de l'époque. (1971)

-LEMAIRE (Jean-Marie): Biographie des militants ouvriers du Pas de Calais, 1919-1939. (1972)

-LEFEBVRE-HOUTTE (Chantal); LEVEUGLE (Emmanuelle): Biographie des militants ouvriers de la région Lille-Roubaix-Tourcoing entre les deux guerres. (1972)

- DUCHATTELLE(Alain): Biographie des militants ouvriers de l'arrondissement de Cambrai entre les deux guerres, 1919-1939. (1973)
- DANDOIT (Jocelyne): Biographie des militants ouvriers du Nord 1919-1939. (1973)
- PASQUALINI-BEIGANSKI (Ester): La main d'oeuvre féminine textile dans l'arrondissement de Lille, 1919-1939. (1973)
- BOILEUX (Claire); CARRIER (Christian): La grève générale du 30 novembre 1938 dans le département du Nord. (1974)
- TALON (Marie-Françoise): Biographie des militants ouvriers de l'arrondissement d'Avesnes sur Helpe entre les deux guerres, 1919-1939. (1974)
- FONTAINE (Jacques): Biographie des militants ouvriers de l'arrondissement de Douai, 1919-1939. (1974)
- HERAS (Jean-Claude): Biographie des militants ouvriers de la vallée de la Lys et de la Flandre intérieure de 1914 à 1939. (1974)
- IERA(Hugo): Les militants ouvriers dans le Valenciennois de 1919 à 1939. (1974)
- CANNEZ(Marie-Pierre): PETIT (Dominique): Quelques aspects de la vie quotidienne de l'ouvrier métallurgiste dans le Valenciennois de 1925 à 1936. (1975)
- COORNAERT (Agathe); HERNANDEZ (Jean-Pierre): Les dockers à Dunkerque de 1900 à 1939. (1975)
- TIBIER (Michel): Dictionnaire des militants ouvriers à Dunkerque de 1919 à 1939. (1975)
- MATYSIAK (Irène): Quelques aspects de la crise de 1929 dans le Nord. (1975)
- MASSON (Alain); STANIEC (Jacques): Juin 1936 dans les mines du Pas de Calais. Essai sur la grève

説

論

des mineurs. (1976)

キンピリヒ MONPELLIER' 一九六五—一九七二年。

-COSSON (Arnaud): Inventaire de la presse politique religieuse et sociale dans l'Hérault de 1894 à nos jours. (1965)

-PUAUX (Yolande): Proletariat et syndicalisme agricole dans l'Hérault, 1900-1940. (1966)

-COLL (Bernard): Les élections législatives de 1928 et 1932 dans l'Hérault. (1967)

-GROSSAS (François): La réaction de la presse languedocienne devant la guerre civile espagnole, 1936-1939. (1969)

-FAJON (Marie-Claude): L'Italie fasciste à travers la presse languedocienne, octobre 1922-juin 1936. (1971)

-GROS (Marguerite): Les oppositions de gauche dans le sud Aveyron de 1870 à 1936. (1971)

-ROQUES (Pierre): La viticulture dans le département de l'Hérault d'après *Le Petit Meridional*, 1929-1939. (1971)

ナニシー NANCY' 一九六八—一九七五年。

-FRANON (René): Le mouvement ouvrier en Meurthe et Moselle, lumières et contrastes. (1969)

-KAGAN (Etienne): Pompey de 1919 à 1939. (1971)

-MOINE (Jean-Marie): Le mouvement socialiste en Meurthe et Moselle sous la III<sup>ème</sup> République. (1972)

-DAVID (Philippe): L'UD CGT de Meurthe et Moselle face à la scission, 1921-1935. (1973)

-ROSICKI (Jean): Le personnel de la société des mines de fer d'Angervilliers (Moselle), 1919-1973. (1973)

-RANSON (Michel): Le syndicalisme ouvrier en Meurthe et Moselle, 1937-1939: de la "pause" à la guerre.



(1974)

-MAGRINELLI (Jean-Claude): Le Front populaire dans la vallée de l'Orne (Auboué, Homécourt, Jœuf), 1929-1939. (1974)

ナント NANTES' 1929-1939年編' 田中喜久夫。

-BRIOUX (Michel): Le mouvement ouvrier à Nantes, 1919-1931.

-COUMALLEAU: Le mouvement ouvrier à Nantes, 1931-1936.

-?: L'image de la crise dans la presse nantaise 1931-1935.

ニース NICE' 1931-1939年編' 田中喜久夫。

1' 國家及び地方選挙権年鑑。

-BASSO (J.): Les élections législatives dans le département des A. M. de 1860 à 1939.

-BAMBA (V.): La politique coloniale du Parti SFIO à travers *Le Populaire*, 1919-1939.

-NINON (J.J.): Le Front populaire et la Défense nationale.

-SCHOR (R.): La presse française de droite et la crise mondiale de 1929.

1' 参事年鑑。

-MAILLET (M.): Mutations dans l'espace urbain niçois entre 1919 et 1935.

-ZEMOR (M.): La vie cinématographique à Nice, 1930-1939.

-BEN ALLOUL (P.): La gauche de 1932 à 1936 dans les Alpes-Maritimes.

-BORDAS (J.): La droite dans les Alpes-Maritimes de 1926 à 1942.

-CALVIÈRE (D.): La crise économique de 1929 dans les Alpes-Maritimes.

- FALCONNIER (P.): Le monde du travail dans les Alpes-Maritimes, 1919 à 1939. (1975)
- KERESIT (R.): La vie politique à Sospel de 1914 à 1945.
- PASTORELLI (E.): Le tourisme à Nice de 1919 à 1939 (microfilm).
- GSHIND (A.): Problèmes économiques et sociaux de l'agriculture Varoise de 1929 à 1940.
- RIGORD (M.H.): Le Front populaire et la vie rurale dans le Var.
- CASANOVA (H.): Le syndicalisme agricole en Corse de 1919 à 1939.
- LAFAYE (J.): Sartène de 1919 à 1939.
- HAUTY (M.): Les événements d'Afrique du Nord et la presse marseillaise, 1934-1939.
- BOUISSON (B.): L'antichléricalisme à Marseille entre 1919 et 1939. (Thèse microfilmée.)  
レハク REIMS' 一九六八—一九七七年。
- BARBEROUSSE (Bernard): Le Front populaire à Châlons-sur-Marne. (1969)
- BIGORNE (Didier): Le socialisme dans les Ardennes. (1973)
- FALLET (Joël): Le Front populaire à Reims. (1973)
- DUBOIS (Martine); GRASSI (Gilbert): Le Front populaire dans l'Aisne et la région de Soissons: aspects politiques et économico-sociaux. (1974)
- COUVREUR (Liliane): Le Front populaire à Troyes. (1974)
- MALHERBE (Hervé): Socialisme et vignobles dans la Marne, 1890-1959. (1974)
- LEVEQUE (Dominique): *Le Travail*, vie d'un journal socialiste de province entre les deux guerres, 1921-1939. (1975)

- REGNAULD (Francois): Le radicalisme marnais de 1919 à 1939. (1975)
- PIERRE (Dominique): La CGT à Reims de la fin de la première guerre mondiale à la réunification, 1918-1936. (1976)
- シムス RENNES' 一九六八―一九七二年、一九七四年、及び日付なしの各種論文。
- AUFFRET (Pierre): De l'Union nationale au Front populaire (La vie politique intérieure française vue à travers *Le Nouvelliste*). (1968)
- GUEGEN (Bernard): Les associations agricoles en Ille et Vilaine d'après la presse paysanne, 1918-1939.
- LE DRIAN (Jean-Yves): La jeunesse ouvrière de la Bretagne sud dans l'entre-deux-guerres. (1968)
- LE PERU (Daniel): La naissance du Front populaire dans la presse rennaise.
- ROUXEL (Jean-Paul): La naissance du Front populaire à travers la presse du Mans. (1968)
- BORDE (Geneviève): Les relations internationales (1938-1939) vues à travers la presse du Morbihan. (1969)
- CHAPPE (Francois): La vie politique à Paimpol de 1930 à 1938. (1969)
- FERREC (Germain): Breiz Araz et le nationalisme breton entre les deux guerres mondiales. (1969)
- JOUANNO (Nicole): La politique extérieure d'Aristide Briand (1925-1932) vue à travers *l'Ouest-Eclair*. (1969)
- LE SANN (Alain): Breiz Araz et le nationalisme breton entre les deux guerres mondiales. (1969)
- MONNIER (Marcel): La vie politique à Fougères d'après la presse locale, 1933-1939. (1969)
- PIALAT (Danièle): La conférence de Munich, vue à travers *l'Ouest-Eclair*. (1969)
- ROUXEL (Alain): *l'Ouest-Eclair* face au nazisme de 1923 à 1931. (1969)

編 著  
-HELBERT (Jean-Pierre): Le conseil général et la vie économique en Ille et Vilaine, 1930-1950. (1971)  
-DELAHAYE (Jean-Louis): Les thèmes de la droite dans l'Ouest à travers *La Province*, 1928-1940. (1972)  
-LABBE (Anne-Hélène): La vie politique dans l'arrondissement de Dinan de 1928 à 1940. (1972)

-MONFORT (Jean-Claude): *L'Ouest-Eclair*, de l'Union nationale au Front populaire (janvier 1934-juillet 1936). (1972)

-PIRIOU (Eliane): Le mouvement trotskyste en Bretagne de 1935 à 1947. (1972)

-LE FLOCH (Bernard): Les élections législatives de 1936 en Ille et Vilaine. (1974)

-BOUGGEARD (Christian); VIEUX-LOUP (Annick): Contribution à l'histoire économique et sociale de Saint Brieuc. (1871-1948). (1974)

-LE GAL: Les idées politiques d'un radical-socialiste: Michel Geistoerfer, député-maire de Dinan, 1927-1939.

-LEON (Yves): L'évolution des structures agricoles en Bretagne dans la première moitié du XX<sup>e</sup>ème.

-LOCU (Gérard): Le bulletin mensuel de la section d'Ille et Vilaine du Syndicat national des Instituteurs publics de France et des Colonies: 1926-1940.

-TONNERRE (Noël-Yves): Les élections législatives de 1936 à Lorient et dans le Morbihan.

トナーレック TOULOUSE' 一九六八—一九七二年' 一九七四—一九七六年。

-ATTANE (Jean): Le mouvement des grèves à Toulouse de 1919 à 1930. (1971)

-DEMELAS (Marie-Danielle); POUILLIQUEN (Myriam); BRUQUET (Michel): Le mouvement syndical à Toulouse de 1878 à 1930. (1971)

-LANGLET (C.): Conséquences économiques et sociales de la grève de 1929 dans le bassin du Tarn.

- フランス人民戦線研究の新視点(一) (平田)
- PETIT (Bernadette): *Le Midi socialiste* et les problèmes agricoles de l'entre-deux-guerres. (1972)
  - SIERRA(J.): La fin de la guerre civile espagnole vue par la presse toulousaine. (1979)
  - DULOUM (C.): FATH (R.): La presse toulousaine et le Front populaire, 6 février 1934-21 juillet 1937. (1972)
  - PAVILLARD (Anne-Marie): L'implantation du PCF et de la SFIO dans les Hautes-Pyrénées d'après les élections 1919-1936. (1972)
  - CLAUZET (A.); DAGUERRE (B.): Le PC et la SFIO face à la crise à Toulouse (1934-1936). La campagne électorale du Front populaire (janvier-mars 1936). (1970)
  - BRIGNOLS (Christian): Les parlementaires en Lot et Garonne sous la IIIème République, 1870-1940. (1971)
  - GOMEZ; TEUMA: Les élections législatives dans les Hautes Pyrénées. (1971)
  - MARTINI (M. De): Le chômage dans le Sud-Ouest de 1929 à 1939. (1971)
  - MAILLET (P.): La crise économique et sociale à Toulouse pendant la Ière guerre mondiale, 1917-1939. (1971)
  - REDON (Marie-Hélène): La condition de la femme dans l'entre-deux-guerres à travers *La Dépêche*. (1971)
  - REY: Les espagnols à Albi de 1920 à 1936. (1972)
  - DOMINGO (Nicole): L'immigration étrangère dans l'Ariège de 1921 à 1936.
  - COHEN (F.); ZATON (M.): Les étrangers à Toulouse de 1921 à 1931. (1972)
  - BELONDRADE (Janine); ZOCCARATO (Josiane): L'immigration espagnole et italienne à Carcassonne de 1931 à 1972. (1974)

説  
論  
-CASTERA (Annie, épouse MIGNARD): L'implantation de la SFIO et du Parti communiste dans la Haute-Garonne et plus particulièrement à Toulouse d'après les élections législatives de 1928. (1974)  
-GARRIGUES (Nadine): La crise de 1929, les grèves, le chômage dans *La Voix des travailleurs*, 1929-1932. (1976)

-OAUYPHIN (Marc): Mouvement ouvrier et mouvement revendicatif à Toulouse de 1930 à 1940. (1976)

-GAUSSENS (Anne-Marie): Les grèves de 1936 à Toulouse et dans la Haute-Garonne. (1976)<sup>(2)</sup>

続いて、国内及び国際研究のリヌスターマップが行われたこと。このベータ版の編集者同士の一九三〇年代の人民戦線期を取り扱った論文をビクターアップして紹介した。

政治史、一九一八—一九三九年。

Serge PEY: Structures internes et rythmes de développement de la structure d'agitation et de propagande du PCF entre les deux guerres. (Thèse, 3<sup>e</sup> cycle, Toulouse, 1976)

J. J. NINON: Le Front populaire et la Défense nationale. (Thèse, 3<sup>e</sup> cycle, Nice, s. d.)

R. SCHOR: La presse française de droite et la crise mondiale de 1929. (Thèse, Nice, s. d.)

J. MEUNIER: Le Front populaire et le Maghreb. (Mémoire, Nice, s. d.)

J. DELOCHE: Les instituteurs et le Front populaire. (Mémoire, Nice, s. d.)

Catherine PEDERZOLI: Le PCF, 1920-1932. (Mémoire, Nancy, 1974)

A. BOISSENT: Le problème de l'enseignement devant la Chambre entre 1919 et 1954. (Mémoire, Aix, s. d.)

P. PHILIPPE: Romain Rolland et l'Europe jusqu'à 1939. (Mémoire, Aix, s. d.)

Ch. DEPO: Le Front populaire et l'organisation de l'Education nationale. (Mémoire, Aix, s. d.)

- bis) J. LEFFEBVRE: Le mouvement trotskyste en France, 1936-1940. (Mémoire, Dijon, 1972)  
経済史。
- M. NOUSCHI: La politique financière du Front populaire. (Mémoire, Nice, s.d.)  
農村在住者。
- Regis FRICOT; Pierre GENAITAY: Dorigères et le mouvement paysan. (Déposé à Rennes)  
労働組合運動、一九一四—一九三九年。
- Claudine HERODY: *La Vie Ouvrière* face aux problèmes culturels et scolaires, 1919-1935. (Mémoire, Reims, 1977)
- Hélène BERNARD: *La Révolution Proletarienne* de Monatte et l'unité syndicale en France de 1929 à 1939. (Mémoire, Grenoble, 1969)
- Christian BERLINNET: De la rupture à l'unité: La CGT à l'époque du Front populaire. (Mémoire, Lille, 1973)  
宗教。
- François CHEREL; A. M. ISAMBERT: Les catholiques et le Front populaire. (Mémoire, Rennes, 1970)  
植民地主義に対するコミンテルン労働運動。
- V. BAMBBA: La politique coloniale de la SFIO à travers *Le Populaire*, 1919-1939. (Thèse, Nice, s.d.)
- ANGELLI: L'opinion française et l'Algérie de 1930 à travers la presse et le livre. (Thèse, 3<sup>e</sup> cycle, Paris X)
- Véronique AUZEPY: Le problème colonial à travers *l'Humanité* 1928-1935. (Mémoire, IEP, Paris, 1970)<sup>(2)</sup>

続いて、雑誌第二号は、一九四四―一九四八年の労働組合組織文書に関するアンケート、質問原案と付随書簡等を掲載している。それは、最初二年間の活動の概要を記録している。この活動は、何の財政手段もなく実行され、とりわけ労働者同盟指導部の完全な協力の下で進行した。すなわち、労働総同盟 C G T、労働総同盟・労働者の力派 C G T・F O、フランス民主労働同盟 C F D T 及びフランスキリスト教労働者同盟 C F T C の各組織について、その保持する同盟文書の提示やそれぞれの組織が実施した目録作成等の大要が、具さに紹介されている。これらの事業の完成のために、その財政的な裏付けが要望される。先ず、J・L・ロベール Jean-Louis Robert による労働組合組織文書に関するアンケートが掲載され、A・ラクロア Annie Lacroix 及び一部 J・L・ロベールによる C G T 文書が、連盟文書、各種産業別の連合文書、パリ地区 C G T 県連合文書及び各種文書としてリストアップされ、A・ベルグニッツ Alain Bergougnoux による C G T・F O 文書が、連盟文書及び連合文書目録として整理され、そして、M・ローネイ Michel Launay による C F D T と参考資料が、その参考資料と文書とに分けて詳細に記録されている。次に、J・ジローによる一九三〇年代の教員指導者に対するアンケートが、その作成目的及び全国的規模での拡大や質問項目一―三その他の資料とともに些細に収録されている。<sup>(1)</sup>

## 二 幾つかの代表的労作の内容と問題点

このパラグラフでは、昨年（一九七九年）入手することの出来た五つのメモアールについて、その内容を概括的に記しかつ幾つかの問題点について論評を加えることにしたい。

### A Ch・ブランの論稿

第二に取り上げる論稿は、Ch・ブラン Charles Blanc の筆に成る「フランス中央部の共産党週刊紙『解放者』L'Emancipateurを



通して見た共産党と左翼の統一(一九三〇—一九三六年)」(労働組合運動史センター提出修士号論文 一四二頁)<sup>18)</sup>である。

Ch# フランは、先ず序論の中で、フランス共産党史の一九二〇年から第二次大戦勃発までを二つの大きな時期に区分している。第一の時期は、一九二〇年から一九三四年までで、その間党はソ連邦ボルシェヴィキの原理的立場に位置づけられており、第二の時期は、一九三四年から一九三九年までで、その間党は完全な裏返しの立場を採ったとされている。この論稿では、共産党がフランスの左翼、とりわけ社会党とどういうタイプの関係を保持したかが、フランス中央部の四つの県、すなわち、シエール Le Cher 県、アリエ L'Allier 県、ニエール La Nièvre 県及びアンドル L'Indre 県に限定して論及されている。<sup>19)</sup>『解放者』紙は、日曜日にだけ発行される四頁の週刊紙であり、県レヴェルから地方レヴェルでの党機関紙としての役割を果たし、事務所はシエール県の首都ブルジュ Bourges 市に置かれた。フランス共産党は、当時地方機関紙を持っていなかった。『解放者』紙の第一面には、国内及び国際レヴェルでの直接のニュースと社説が載り、第二面と第三面には、各都市発信の地方の記事だけが載り、第四面には、思想と文化に傾斜した記事が目立っていた。この新聞発行地方の社会環境を述べると、この地方の人口の大多数は、小土地所有農民、小作農民及び分益小作農民であり、選挙診断の時には、その多くが社会党候補者に投票していた。森林伐採労働者だけが、共産党候補に投票していた。この地方には、大工業中心地はなく、分散した一連の工場、とりわけ加工産業が点在していたに過ぎなかった。とくに、民間産業では、党の宣伝及び出版活動が困難を極めた。一九二四年から一九三二年にかけて、政府及び経営者レヴェルからの弾圧は、党活動を阻害する強力な条件として作動した。『解放者』紙の購読は、三つの大きな時期に分けて考察することができる。第一の時期は、一九三〇年から一九三二年五月の選挙までの時期で、この間党は、第三インタナショナル執行委員会の指令通り、「階級対階級」のスターガンズを頑として適用する。第二の時期は、一九三二年六月から一九三四年六月までの時期で、この間党は、不確定と模索の経験を積み重ね、党以外のフランス左翼に対する戦術修正、すなわち方向転換に関して、接近策や分裂策の議論を蒸し返していた。第三の時期は、一九三四年六月から一九三六年の立法選挙までの時期で、この間党は、人民戦線への目醒ましい転換を経験し、党は新しい突破口を切り開くとともに、第三共和制の政治生命の中に深々と挿入された。<sup>20)</sup>この論稿では、フランス中央部四県における党とフランスの左翼、とくに社会党との六年間の関係の発展が検証されている。

第一章は、「階級対階級」(一九三〇—一九三二年)という見出しで論述が進められている。このユニークな統一戦線戦術の意義は、一

九二八年のフランス議会議選擧の際、フランス共産党宛てに出されたコミンテルン書簡の中で示唆され、一九二七年十一月十日の党中央委員会による黨員大衆への公開状の中で明らかにされた。この戦術を適用して実施された選擧は、党にとって惨めな結果しか生まなかつた。ところで、党指導部は、そこから全然教訓めいたものを引き出さなかつた。一九二八年五月八日の党政治局コミュニケが、そのことを明らかにしている。一九二八―一九三二年は、党史にとって暗くかつ困難な時期であつた。一九二五年に五五、〇〇〇を数えた黨員数は、一九三〇年には三九、〇〇〇に、一九三二年には三〇、〇〇〇に減少した。『ユマニテ』紙は、一九三〇年に日刊二〇〇、〇〇〇部を数えていたが、一九三二年には一五〇、〇〇〇部に落ち込んだ。一九二八年六月二十一日、Aリタルディユーの命による警察の弾圧は、党を半非法の状態に追いやった。一九三二年夏、バルベールセロール事件が発覚する（バルベールセロールグループに閉しては、コミンテルン組織もその責任を免れない）。当時の党のイメージは、大変暗かつた。黨員数や出版部数の減少はもちろん、党内には自由討論の雰囲気がなく、党官僚機関の比重かとみに高く、とりわけ党指導部の権威主義 *authoritarisme* が極度に幅を利かせていた。<sup>(21)</sup>一九二八年の立法選擧での党得票率は、九・三％であり、一九三二年五月の選擧では、それがさらに六・八％に低落する。一九二七年以降、党はとくに社会党や労働者諸勢力から完全に分断されていた。Mリトレースは、『人民の子』の中で、当時の党のセクト主義の害について鋭い分析を加えている。<sup>(22)</sup> 当時党にとっては、民主主義的中央集権主義への復帰が至上命題だつたにもかかわらず、党の政治路線については全然問題にも付されず、党機関紙等の中心的思想は、依然として「社会ファシスト」攻撃一本槍であつた。一九三二年十月十八日の郡選擧でも、党は新たな失敗を経験した。こうした一連の重大な敗北が、やがて党の政治戦術の転換を強要し、それはまた国際情勢の新たな発展とも密接に連動していた。『解放者』紙の購読を通じて、この発展の研究を追跡して見ると、四つの県の労働者階級や党の地方責任者たちが、敏感に感じ取つた大きな問題点が幾つか抽き出される。すなわち、そこからは、三つの基本的なテーマが露となる。第一のテーマは、国際政策ではソ同盟の無条件擁護とソヴェト方式による資本主義体系転覆の一般的戦略であり、第二のテーマは、党と他の左翼政治諸勢力との関係、すなわち、独特な展望の下における統一戦線であり、そして、第三のテーマは、党固有の問題、例えば大衆側での党支持者、地方内での党の定着、戦闘的な党の実践力、党出版物の普及及び党の内部問題等々であつた。その例証の一つとして、一九三〇年六月二十八日のシャトー・シノン Chateau Chinon 細胞の決議（一九三〇年七月十三日付け『解放者』紙掲載）は、当面する三つの優先的な

目標を掲げた。すなわち、ソ連邦の擁護、教々の罪状を持つ社会党及び労働総同盟指導部の告発、並びに共産党及び統一労働総同盟の背教者たちの糾弾が、その内容であった。<sup>(28)</sup>当時、党による資本主義体系の一般情勢の分析においては、コミンテルン第六回大会で決定を見た綱領テーゼが頑なに参照されていた。例えば、一九三〇年七月二十七日の『解放者』紙の社説の中で、G・コルナヴァン Gaston Cornavin は、フランスにおける直接的な社会主義革命(とくに、革命軍の創設等)のテーゼを力説し、資本主義か社会主義かという選択肢に關するオール・オア・ナッシングの徹底した戦略目標を、妥協の余地なく描き出している。一九三二年五月二日の『解放者』紙では、議会及び選挙診断の分析を行った上で、企業、都市及び農村ソヴェトの創設による、労働者、農民及び兵士による即刻の真のプロレタリアーデモクラシーの確立を訴えている。地方レヴェルでの反響として、例えばシェール県フォージ Foey 市の例が挙げられ、一九三〇年七月十三日の『解放者』紙に載ったE・ロートイエ E. Caulier 論文「階級的スポーツ」が引証され、スポーツ界でも勤労者スポーツ連盟 FST 以外のブルジョア・スポーツが徹底して排他的に攻撃されている。当時の機関紙に載っている諸論説の基調は、いわゆるセクト的な戦略一色に塗り潰されており、ここでは、国際主義の原理が、ソヴェト制の無条件連帯だけに大きなスペースを割いて強調されており、しかも、それが社会党員の裏切りという攻撃視角から論断されている。他方、窮地に陥っている帝国主義世界が描き出され、とりわけロシア革命打倒の前衛を担うフランス帝国主義が特筆されており、そのさい、ブルジョア平和主義に加担している社会民主主義の役割が厳しく糾弾されている。党機関紙では、一九三〇年と一九三一年には、国際情勢に関する記事が圧倒的なスペースを占めている。八月一日の国際反戦デモの実情、インドシナにおけるテロルの実態並びに中国ソヴェトの進展の模様などが、逐一報じられている。ソ連邦への言及はその頻度が高いが、今日いわれている、いわゆる一国社会主義建設論やスターリン神格化 deification の問題は、まだ判然とした形を取っていない。例えば、スターリンに関して、一九三〇年から一九三三年まで、『解放者』紙は、二度しか引証していない。<sup>(29)</sup>ところで、一九三〇年代に、フランス共産党は、国際労働運動の多様な経験に着目し、全国レヴェルでそれこそ困難な戦いを展開するが、そのさい党は、党の排他的な指導の下に勤労大衆を再結集すること、かつ勤労大衆の資本主義体系破壊に対する階級意識の目醒めを促進することに専心した。その場合、党は、その闘争を他の労働者及び社会党諸勢力と共同で行う単一の戦いとしてではなく、党が唯一の前衛党であることを自覚して、その日常活動は、他の政党及び組合組織の危険な役割を暴露しながら実行するという傾向性を持っていた。同時

に、党は、党内右派及び左派との戦いをも進めた。トロツキスト攻撃も、熾烈であった。アリエ県ムーラン Moulin 市在住のコリネ Collinet が、その攻撃目標に指定された。社会党指導部に対する敵愾心は、そのオクタールに拍車がかかる一方であった。レオン・ブルムが、その標的の一人に選ばれた。一九三〇年の『解放者』紙における一連の社説の中で、G・コルナヴァンは、一九一四年時と同一の評価に基づいて、社会党を、祖国防衛に基づき帝国主義戦争を準備する有害な組織として論難した。階級対階級戦術に基づき、強力な統一戦線、すなわち下部での統一戦線という構図が、その基底に描かれていた。労働総同盟指導部に対する攻撃も、峻厳を極めた。そのケースターディとして、一九三〇年夏場の当地区における製陶工業労働者のストライキが選ばれている。このストライキには、二、三〇〇人の労働者が参加し、四か月以上続けられた。要求目的は、賃銀増額と労働条件の改善であった。統一労働総同盟は、仇敵関係にある労働総同盟との統一要求綱領作成を拒否した。党と統一労働総同盟は、単独指導を渴望していた。同年七月半頃から、ストライキ参加者の間に亀裂が生じ、八月末には、労働が再開された。九月末までストライキが続けられたのは、ヴィエルゾン Vierson 市だけであった。結局、労働者たちの要求は、満足させられなかった。このストライキの過程で、統一労働総同盟の地位は強化された。ストライキの失敗は、地区プロレタリアートの責任に帰せられた。次いで、党の当該地区における現実の比重等について、一九三二年の立法選挙が引き合いに出されている。この地区の労働者は、三つの工業部門、すなわち、加工冶金工業、化学工業及び製陶工業に集中しており、それらの工業は、モンリュソン Montluçon、シャトール Châteauroux 及びヌヴェール Nevers 等十三の都市に点在していた。社会党及び労働総同盟に対する攻撃の体系的利用は、果たして党の強化に繋がったのであろうか。新聞を購読しても、労働者からの通信は、ほとんどいい程見当たらない。一九三二年一月四日の『解放者』紙によれば、就中、ヌヴェール、ヴェルゾン及びモンリュソン大工場で、党の影響力はそれ程増大せず、党の出版物、工場新聞並びに個人的な宣伝は、ほとんど滲透しなかったことが指摘されている。また、党は、青年層に対して積極的な宣伝活動を行った。それは、一九三〇年と一九三二年の上半期に顕著な形で見られた。ところが、一九三一年七月以降になると、青年層を対象に扱う論文は、新聞面から突如として欠落する。これには、例のバルベール・セロール事件があるいは関与していたのかも知れない。事実、共産主義青年同盟 J.C. は、一九二四年から一九二六年にかけて、党の尖兵たる役割を果たし、その後、党組織指導部内には、同盟出身の古参メンバーが昇進してきていた。ところで、一九三〇年の時点では、当該地区において、同

盟は、社会主義青年組織やカトリック系労働者及び農民青年組織と比較して、その力を失いかけており、強力な組織再建に取り組まざるを得ない必要性に迫られていた。そのさい、宣伝の主な中心点は二つであり、すなわち、企業内と、とりわけ軍隊の兵営内とが重視された。次に、農民問題等への言及は、新聞面では極めて乏しかった。農民通信は、労働者通信に比べ、ほとんど不在といった状況であった。当該地域は、フランスでも典型的な農業地域の一つであったが、ここでの農業危機の問題は、二年間にわずか二度だけ言及されたに過ぎなかった。ところで、党は、このフランス中央部の小農民の間に一定の定着を示しており、小農民たちは、党にそれなりの信頼を寄せていた。小農民は、党に、自分たちの運命を改善するための具体的な綱領を期待した。しかし、この種の議論は、党内でもウィークてかつ平凡であり、あくまで仰々しい一般論しか展開されなかった。すなわち、共産党の提案は、貧農に対する補助金の付与、課税及び夫役の免除並びに小作料の減免と分益小作農に少なくとも収穫の三分の二を分配することをその骨子としていた。<sup>(26)</sup>そして、究極の解決策は、資本主義制度の急激な変化及びその転覆でしかあり得ないことを付言していた。農民層は、靦して、共産党の宣伝には極めて敏感な反応を示し、一九三一年及び一九三二年の選挙でも、工業化されている都市中心部では党の得票に出血を見たのに、農村地区ではやや安定した得票基盤を見出し出していた。さらに、各種の示威運動(集会、選挙運動、製陶工場ストライキ、五一・デモ及び八一・デモ等)や党スロ・ーガンに対する地区大衆の感受性が問題であった。しかし、こうした実績から推しても、党の戦闘性は欠如しており、とりわけ党地域の日常生活にとって、党は極めて不十分な存在でしかなかった。党出版物の普及も、困難であった。一九三〇年九月末からの予約購読キャンペーンは、党出版物を通しての宣伝活動の強化がその最大の狙いとされた。ほとんどの地域内細胞が、然したる努力を払わなかった。やがて、『解放者』紙は、購読申込の募集を断念した。このことに、当時の党の欠陥が集中的に表出していた。党の当地域での影響力は、当時最高に弱体であり、党は、出版物頒布を通じてそれを克服しようとしてみたのである。『解放者』紙は、一九三〇年七月から一九三二年三月までの間に、この深刻な問題について、八つ程の論文を掲載した。ここでは、党の悩みは、黨員の側に党の政治路線が不十分にしか同化されていない点及び党戦略そのものには問題はないが、それが大衆へ伝達される方法に大きな隘路が存在している点が強調された。G・コルナヴァン(一九三〇年九月七日『解放者』紙)、B・フラシオン(一九三二年九月十二日同紙)及びM・トレーズ(一九三一年十月十日同紙)の論稿がその引き合いに出されており、バルベ・セロール・グループの除去と階級対階級戦術(一九二八年)への回帰とが

強調されている（ただし、当地域でのグループの影響力はほとんどなかったとされている）。当時の党の活動状況を概括すれば、宣伝活動は不十分であり、街頭デモや集会には極少数の勤労者しか結集できず、工場内での定着も不十分（地域の細胞総数二〇〇の中、企業細胞は二〇で、工場新聞はない）で、政治教育は不足し、党員の大半が読書せず、細胞組織は減多に適合を聞かず、さらに軍隊や青年に対する働きかけは皆無に近い状態であった。党は、一九三一年十月の郡選挙でも、「階級対階級」戦術に基づく選挙戦を行った。社会民主主義は、ブルジョアジーの主たる社会的支柱として、また、ソ連邦に対する連合帝国主義勢力の戦闘の道具として、その反革命的な役割が強調された。それと並行して、党は、あらゆる傾向の労働者たちの結集を呼びかけ、とりわけ、社会党系労働者たちに友愛の手を差し延べる戦術をも行使した。このことは、新しい事実であった。党は、社会党支部に公開状を送り、その中で、地方的に最小限綱領を編み出し、社共両党が相互に立候補者を取り下げる選挙戦術を訴えた。若干の社会党支部が、それを受け容れる姿勢を示したが、党は、依然として社会民主主義に対するその假借なき闘争を敢行する必要性を否定しなかった。より柔軟な戦術に見えた部分も、こうした基本的戦術の戯画化に対する修正という形で説明された。例えば、ヴィエルゾン地区では、この戦術行使は至って不完全であり、シャートルー郡では、支部の労働者に公開状が送られ、一般的要求（賃銀、組合統一、失業保険、平和とソ連邦擁護）と地方的要求（郡固有の問題）に基づく結果が要請された。選挙の結果は、党陣営に大きな失望を与えた。宣伝活動の不十分さが、とくに目立っていた。四つの県の三十五の選挙区の中、十六の選挙区では、集会が全然組織されず、また、若干の選挙区では、回状が送付されたに止どまっていた。選挙戦術は、多くの党員に良く理解されていなかった。階級対階級及び統一戦線のスローカンも、決して同化されず仕舞いであった。その後の選挙診断では、一九二八年の超セクト的戦術への完全な復帰が見られた。一九三二年五月の立法選挙では、大衆への党の影響力の喪失が一段と拡大された。共産党にとって、第一回投票の結果は、正に破局的であった。地域内二十の選挙区で、共産党の当選者は一人もなかった。第二回投票でも、党の選挙命令は、党有権者に聞き入れられてもいなかった。十七議席の中、社会党が十、急進党が四で、共産党は〇議席であった。わずかに三選挙区で、党はその立場を強化したか、ほぼ現状を維持したに過ぎなかった。多くの都市では、党の出血が目立った。党は、徹底的に敗北を喫した。一九三二年五月十四日の『解放者』紙は、その失敗の原因を党の日和見主義的受動性に求めた。党指導部は、社会党に対する戦略修正にやとり掛かった。「社会党という鳥の羽を取り取る」「*plumer la volatile socialiste*」時期は、過

ぎ去ろうとしていた。

第二章は、「言葉を濁す時期」(一九三二—一九三四年)という見出しで論述が進められている。フランス社会党の「ファッション化」現象は加速されるとする、党指導部の予測は、やがてその誤りが明白となった。一九三二年選挙の結果、事実問題として、社会党は共産党との対話者の地位にあり、かつその立場を強化した。また、この選挙で、共産党有権者の二人に一人が、社会党候補者に投票した。この二つの組織の関係は、一九三二年から一九三四年にかけて、一種の振り子のような動きを示した。すなわち、党は、セクト的展望に基づく伝統的な統一戦線戦術に固執する一方、党は、大衆からの圧力を受けて、行動統一へ向けてその臆病な努力を傾注し始めた。ところで、党の政治路線は、不変のまま固持されていた。ただ、社会党との論戦や討論の調子は、従前の攻撃や非難から、より率直でリアルな意見交換へと転換し始めた。党は、最初の十二年間は、一党派 *single party* の地位にあった。党が模索し始めた新しい政治路線は、権力及びブルジョア社会との関係では党の外在性をテーゼの段階で手を付けないまま、しかも使用する言葉は同一であっても、従前とは反対の政策を指向し始めた。一九三五年のコミンテルン第七回大会での報告の中で、モロカジャンは、フランスの統一及び人民戦線が、一九三二年八月のアムステルダム大会にその起源を持つことを明言した。しかし、統一への道は、屈曲に満ちていた。一九三二年から一九三四年までの『ユマニテ』紙を通読しても、党の政治路線に変更はなく、社会党支部との協定交渉も、踏踏、模索、それに断絶が付きまとい続けた。一九三二年十二月二日、パリのビュリエ *Bullier* 広間での集会の席で、モトトレーズは、二つのインタナショナルの交渉に接触、相手の接近過程が、専ら社会党側の態度の硬化によって封じられた点を強調した。社会党側は、上部での接触のみを強調し、下部での交渉はこれを峻絶しているときれた。党は、第三インタナショナル執行部の致命(一九三三年四月一日決議)により、伝統的な戦術へ完全に復帰した。その戦術は、何は措て置き、資本主義の転覆、とりわけ、武装蜂起によるファシスト独裁の転覆を目指していた。コミンテルン執行委員会第十三回総会のテーゼも、社会民主主義の詭弁性を糾弾すると同時に、社会党系労働者を共産党の側に引き付ける方針を盛り込んでいた。一九三四年二月事件でも、党指導部の態度には何の変化も見られなかった。二月六日の『ユマニテ』紙に載ったA・マルティ論文及び二月八日の『ユマニテ』紙に載った政治局の労働者へのアピールは、何れも二つの戦線、すなわち、ファシズムと社会民主主義に対する闘争を継続する必要があることを主張していた。約二か月後、モトトレーズは、四月十三日の『ユマニテ』紙で、党は

社会民主主義とは統一せず、あくまで共産党の指導の下で強力な革命的統一戦線を樹立する必要を強調した。一九三四年六月二十六日、イヴリー全国協議会で、決定的な転換が行われ、「下部での統一」という路線は、「あらゆる犠牲を払って統一」という路線へ転換した。共産党側は、この「公式の」テーゼが、プロレタリアート大衆の圧力によって、社会党指導部が行動統一の受諾に迫り詰められたのだと解釈したが、ここでは、社会党側がドイツのヒットラー主義の脅威を前に打ち出した「共和派的諸自由の防衛」政策に共産党側が結果したという側面が明確にされていなかった。フランス中央の四つの県で、二つの組織の関係は、全国レヴェルと同じリズムで発展したのかどうか、統一問題に関して地域ミリアンのプロフィールは、どのように作り出されたのか、社共両党の接近過程は、六月末の公式の転換以前から見られたのかどうか、そして、党は、この過程からその党員数や影響力について何らかの利益を引き出したのかどうか、といった点<sup>(29)</sup>が吟味されねばならない。共産党の社会党との関係における第一のテストは、一九三二年五月選挙の翌日、RロランとHバルビュスの呼びかけた反戦世界大会（一九三二年七月八月）を組織するためのアピールにどう対応するかということであった。一九三二年六月十一日の『解放者』紙に掲載された、Rロランのインタヴューの中で、Rロランは、この問題を、非常に広い統一の展望の下で構想していた。ところが、地方では、このイニシアティブが鼓初目的から逸れて、それが、社会党員に対する新しい攻撃のスプリングボードになるものと受け取られた。地方の反響を見ると、例えば、アリエ県のモンリュソン市の場合、市支部書記のJオークテュリエ Jean Aucourrier は、一九三二年七月九日の『解放者』紙の中で、全世界の社会党を非難する論陣を張っており、同年七月三十日の『解放者』に載った、党の社会党及び労働総同盟系労働者に対する公開状の中では、社会党員をはっきり「ファシズムの下士官」「Fourriers du fascisme」という形で断定していた。ところで、アムステルダム大会地方代表部の報告書では、当大会で、社会党員、共産党員、赤色労働組合員、それに、改良派組合員の間で、反戦活動に関する全員の意思統一がなされたことが記されていた。アムステルダム大会が、討論開始のきっかけとなった。党の地方組織が、集会の組織に乗り出した。そのモデルとされたのは、一九三二年十二月二日、プロレタリア統一党 PUP 全国書記 L P ルイ Lévy Paul Louis のイニシアティブによりパリのビュリエ広間で開催された集会であった。この席で L P ルイは、共産党員、社会党員、それにビュピスト Pupistes は自由にその見解を発表すべきであると強調した。一九三三年十二月十六日、ヌヴェール地区党書記は、社会党及びプロレタリア統一党地方支部に書簡を送り、公けの集会を共同で組



織することを呼びかけた。これら二つの組織の返答は、一九三二年十二月三十一日の『解放者』紙に掲載された。そこでは、大要、中央機関相互間で全国協議会を先ず実現させることを要望し、何よりも労働者及びその組織の分裂を憂慮している点を強調している。地方責任者の返答は、先ず、一九三二年十二月二十三日付のニエーヴル *Nieuvre* 社会党連盟のもので、同連盟は、一九三二年九月五日にヌヴェールで大会を持ち、一つの誓いを採択した。そこでは、先ず、ブルジョア階級の政策が、三つの主要な方向、すなわち、(a) 労働者階級、その生活水準及びその諸自由に反対する闘争、(b) 国内市場を利潤の手段及び独占に変換し、労働者階級を抑制できない失業により分断する経済的ナショナリズム、(c) 国際紛争の直接的原因となる軍備競争を具有しているとし、社会党の思想を中心に労働者諸勢力の結集を図ることが、脅威的なファシズムの圧制に抵抗する唯一の手段であり、かつプロレタリアートの統一を実現し、労働者階級の分裂に終止符を打つ結果を生み出す、そのためには、プロレタリア統一党及び社会党の中央組織間に予備協定を結ぶ必要がある、それがなければ政治集会は有効裡に組織されない。それには、P. フォールがM. トレーマに示した三つの条件、すなわち、共同事務局、参加組織の自由委される出席カードの数の平等及び侮辱や暴力不使用が、必要である、この種の協定が何も存在していない現在、提案を実行に移すことはできない。発信人は、同連盟書記 A. バヴェール *A. Bavelle* であった。同じ日付けで、プロレタリア統一党からも返答が届き、そこでは、地方組織が現在プロレタリア統一党に加入しようとしており、この手紙を中央委員会に知らせ、その指令に基づいて然るべき行動を取る方針であることが記されていた。発信人は、同書記 G. デュシェマン *G. Duchemin* であった。ところが、共産党は、一方的にその話し合いを中断した。党政治局は、M. トレーマの筆で、一九三二年二月六日、社会党書記局へ手紙を送り、はっきりその方針を拒否したのはノール県だけであったにもかかわらず、この方針が無益である旨を伝達した(二月七日『ユマニテ』紙)。実際、他の多くの地方では、相互接近の可能性が見えていた。ヒットラーの権力掌握及び最初の話し合いの分裂から一か月後に、新たな激変の始まりが記録された。コミンテルンのアピールやフランス共産党中央委員会の宣言が、社会党系労働者及び社会党執行委員会に向けて出され、それらのテキストは、一九三三年三月十一日の『解放者』紙に掲載されたが、そこでは、賃銀、財政負担、小作料並びに労働者の自由の防衛を求めて街頭示威やストライキを実施するためには、全労働者の闘争の共同戦線が必要であること、そして、新しいことは、この共同行動の過程で、共産党は、参加組織に対するすべての攻撃を中止する用意があるとしたことであった。当該地区は、多くの転換で多少の

「動搖」が見られた。G・コルナウアンは、拡大地方委員会の報告書（一九三三年三月二十五日『解放者』紙）の中で、その多少の混乱を認め、新しい政治路線が問題なのではなく、伝統的な路線をよりよく適用するさいに必要な新しい手段を履行することが重要なことを力説した。すなわち、戦術そのものではなく、戦術の適用の修正が重要であった。党内のセクト的分子は、この修正をも拒否した。多くのミリタンが、この方向転換に関して途方に暮れていた。この地方では希薄であったが、例の「グループ」のセクト的行動は、二年後にもなお尾を引いていた。この新しい指令に基づく新しい接連の試みは、シャートルール市から開始された。共産党地区は、一九三三年三月三十一日にアンドル県社会党連盟に手紙を送り、反ファシスト闘争委員会を五つの具体的提案を基盤に、また全国アピールを伴って造り出すよう提案した（一九三三年四月八日『解放者』紙）。この提案は、結論として、社会党のブルジョアニーに対する協調政策の放棄を方説していた。これに対する社会党の返答は、大会の場から寄せられ、その中で、いわゆる「統一戦線」のスローガンは受諾できないこと、協調政策については、これを善意で支持する黨員もおり、またこの政策と戦う黨員もいて、結局は多数の法則に従わざるを得ないこと、この政策は、一定の時期を限ってマルクスやレーニンも推奨したことを強調し、さらに、アンドル県社会党連盟は、公けの集会や出版物で共産党への攻撃を避けてきたことに注意を喚起した。そして、シャートルール労働組合事務所書記の示唆により、ファシズムに反対するすべての組合や政党勢力の結集を呼びかけた。一九三三年五月一日の闘争デーで、初めての統一集会在開催された。一九三三年四月二十九日（土）の『解放者』紙は、第一頁全部を割いて、五月一日の労働者の行動統一の偉大な日に充てた。そして、シャートルールのケースとして、当市では、自治的組合員、労働総同盟組合員、それに統一労働総同盟組合員が、自分たちの生活条件について共同協定を結ぶ気運を持っていることを伝え、またブルジュエのケースとして、当市では、労働者の地方同盟指導部が、すべての運動に参加しようとしている実情を伝えている。次の週、G・コルナウアンは、労働者闘争の更なる拡充と労働者の統一及び共同集会の必要を訴えた（一九三三年五月六日『解放者』紙）。当地方では、五月一日に全体で十四の集会在持たれ、以前の五一デーに較べ参加者はずっと多かった。とくに、シャートルール市の反ファシスト集会在注目されたが、しかし、党の方針はまだ多くの党責任者に同化されていないかったし、党地方局は、この種の集会在を「政治的誤謬」として論難した。この集会在は、史上最初の大共同デモであり、多数の参加者の中では労働者の数が圧倒的に多く、社会黨員、共産黨員、労働組合、それに未組織労働者が混在していた。ところが、共産党は、社会党に痛撃を加え、とりわ

け社会党のリーダーを反動派として攻撃する論陣を張った(一九三三年五月十三日『解放者』紙)。党地政局も、同じ非難を開始した。モクト主義の城砦と見做されていたムーラン Moulines 市では、党の一般方針は問題にも付されなかった。五月十三日の同紙は、階級的統一戦線として二つの事例を紹介している。一つは、五月八日、「フランス行動団」の集会に対抗して、社会主義及び共産主義青年同盟が共同デモを敢行した事例であり、もう一つは、その二日後、V・パッシュの人権同盟の集会が、ファシズムの高揚に反対する行動を起こし、党地区メンバーがこの集会に参加した事例であった。党の意図は、しかし、反ファシスト闘争の統一展望ではなく、党の比重を示威し、かつ、結局は戦争準備に協力しているV・パッシュらを攻撃するために、参加を呼びかけたのである。統一戦線は、率直で直接的な対話方式を活用して実現されなければならなかった(一九三三年六月三日『解放者』紙のL・ガティニョン L. Gattignon 名社説)。十八か月間で、統一への重要な一歩が踏み出された。統一戦線は、神話から現実へ転移しようとしていた。アンドル県社会党連盟書記バル、Parpais のように、この統一への流れに対する頑固な敵対者もいた(五月二十四日「中央からのアピール」)。党は、ファシズムとブルジョア民主主義は、同じ現実の二つの面として相互に補い合っていると思考し、労働者の防衛組織は、資本主義の残忍な力が行使される以前に実現されていなくてはならないと認識していた。社会党とのローカルな関係について、シニール県の場合は、ブルジュ党地区責任者が、シニール県社会党連盟へ書簡を送り、交渉を申し入れ、同書記R・ランジュリク R. Lazard からの好意的な返答を俟って、相手の代表が、一九三三年六月七日に、ブルジュ労働組合事務所で会合を開き、全員一致で、未たる六月二十二日にプロレタリアートの組織統一について話し合いを持つという決議を採択した(一九三三年六月十七日『解放者』紙)。ところが、党は、この共同決議の曖昧な一般論的性格にクレームを付け、社会党は、直接共同行動のための協定実現を拒否する立場を隠蔽しており、また、当面の問題を避けるために一連の遷延術策を弄していると論破し、地区の同志たちが重大な誤りを犯したとして糾弾した。一週間後、一九三三年六月二十四日の『解放者』紙は、六月十八日の地区委員会の決議を紹介し、その中で、前述の共同決議を非難し、この決議が、統一戦線戦術に関するコミンテルンとフランス共産党の方針に反しているとして、一つ一つ、その内容を論破している。すなわち、(a) その原因や責任をはっきりと位置付けないで、労働者階級の分裂を遺憾として共同宣言を発表することは、唯一のプロレタリアートの革命党たる共産党と、ブルジョアジーの主たる社会的支柱たる社会党との差異を隠蔽することになり、また、労働者階級の二つの政党が存在することを想定させ、(全労働

者の統一戦線の実現に組織的統一を対立させるフランス社会党の術策を容易にする。(b) 決議、ファシズムと戦争というそれぞれの脅威が、シュール県の共産党地方と社会党連盟とを行動において統一させる結果を生むと指示している。しかるに、即刻闘争を展開する必要がある。階級敵が十分に組織され、プロレタリアートに対する攻勢を開始するだけの十分な力を持ったと感じるまで待つてはならない。反戦反ファシズムの闘争は、フランス社会党が抵抗を示しているアムステルダム大会から生じた運動の強化によって表現されなければならない。(c) 組織的統一をどのようにして実現するかを検討するための新しい集会に参加して、フランス共産党の代表は、統一の下部での変化を避けるための話し合いを延引させようとしている術策に嵌まり込んでしまった。そうした議論を受け入れると、労働者階級の混乱を維持することに貢献する。あらゆる連合は、わが党がその階級的立場を放棄することを意味するので、到底不可能である。このテキストは、党の統一戦術の限界を示している。すなわち、共産党は、単独で労働者階級の政治指導を行う予定であった。党は、その固有の組織を通してしか、組織的統一の実現を考えなかつた。他方、党は、党の衛星のような組織であるアムステルダム大会という手段でしか、反戦反ファシズムのあらゆる行動を考えなかつた。党の官僚的実践の良い例証として、機関紙の論評では、党が、地区委員会開催以前に、右翼日和見主義反対闘争の名目で、かつ地方内よりよい大衆活動を保障するために、制裁の脅しで迫る態度を取ったことが上げられている。地方では当該地方が初めて、党指導機関が、優先的な指令として、二つの戦線、すなわち、右翼日和見主義とセクト主義に対するイデオロギー闘争を強化する命令を受け取った。一九三三年七月以降、正確には、一九三三年七月二十九日までの『解放者』紙は、フランス社会党に閉して「力への復帰」を表明し、社会党に対して、「ファシズムとの完全な同一性」、「臆病」、「畏切り」、「徹底した戦争前衛党」等々の痛罵を浴びせていた。G・コルナソアンやL・ガティニオンも、社会党員に対して、「特別に辛辣な批評」を行っていた。数少ない集会で、共産党の演説者は、災厄の主な責任は社会党にのみ課せられると力説していた。地方細胞や地方書記のメンバーは、党の独自活動のみを重視し、かつ古いコミンテルンの勸告を墨守する態度を取り、かくしてデア、オリオール、ブルム、フォール、ジロムスキーら社会党領袖たちを嘲笑し、彼らに対する最後の幻想を破壊しなければならぬと論じた。しかし、党の政治方針を正しく適用するさいに、党は、確信のなさや厳格さの欠如を示した。党の脆弱性は、如何とも成し難かった。一九三三年後半期には「大衆の中へ」というスローガンが再浮上してきた。労働者農民大衆の日常的利益の防衛、とくに、労働者の最小限の要求を掘り起こす必要があった。

しかし、党の劣悪の活動方法の多くの具体例が解剖されねばならなかった。例えば、スヴェール地区の県議会補欠選挙で、共産党候補者は、地方綱領に一言も言及しなかったし、オービニイ Aubigny の市町村議会補欠選挙で、共産党候補者リストの政見発表は、細胞の市町村綱領には一言も触れず、ただ全国レヴェルのスローガンを再生するだけで満足していた。前述したように、党は、一九三二年の選挙で多数の票を喪失した。当時の『解放者』紙は、發言の方が直接要求の言及よりもずっと優勢であった。編集者に言わせると、党の統一戦線政策における失敗の原因の一つは、あらゆる提案が地方的性格の要求を何一つ含んでいなかった点にあった。同紙に掲出されるのは、『ユマニテ』紙に載った、共産党から社会党に宛てた手紙の中に含まれていたスローガンだけであった。党指導者は、労働者の日常要求、その労働の場所及びその街区に活動の鋒を向けなければならなかった。数か月後、G・コルナヴァンは、一九三四年二月二十三―二十五日の中央委員会会議の報告を行い、地区の闘争活動について、六か月前に決定した前述の目的と矛盾する結論を述べている。すなわち、大衆のポルシェヴィキ的活動の進歩を祝福し、諸事件の加速度的リズムに対する党の遅れを確認している。その主な原因は、黨員に情勢の重大性を滲透させ、革命的展望の差し迫った現実を納得させる代わりに、新しい黨員募集とか党の影響力の強化とか、地方レヴェルで成功を収める問題に活動の優先性を与えたからである。党、とくに指導部は、ブルジョア権力との求たるべき対決にさいしては、大衆連動の指導権を取り、「プロレタリアート独裁のための闘争まで」戦い抜くこと、その場合、党のスローガンを社会職業勢力、すなわち、官吏、農民、労働者に滲透させる必要がある。とくに、労働者は、「大衆獲得途上での主な障碍物」である社会民主主義の不吉な影響力から分離すべきである。G・コルナヴァンは、ここで初めて、社会黨員に対する政策修正を要求し、一九二七年からのコミンテルンのいうあらゆる展望を否定する中央委員会メンバー（J・ドリオ）に当てつけを行っている。一九三四年二月十二日のゼネストのアピールは、党にとって決定的なテストの意味があった。このゼネストは、大成功であったが、それは、党政策への労働者の巨大な参加によつては説明されない。それは、参加者全体にファシストの危険に直面している現在の状況の下でかかる統一の力が示す力の知覚によつて説明される。Ch・ブランは、二一―二二ゼネストを、攻撃戦略の実現ではなく、防衛的反作用として評価している。五―一デモは、党が統一を準備したが、二一―二二ゼネスト程成功しなかった。二一―二二ゼネストは、当地区にとつて正に先例のない運動であった。ストライキは、モンリュソン、サン・アマン等では完全な形で行われた。ブルジュ市市参加者は、六〇%（ガス、教育、郵便、運輸・電車部門一〇〇%、兵器廠

部門だけ四〇%）であつた。街頭デモ参加者数も、高平（モンリュソン二〇、〇〇〇、ブルジョア八、〇〇〇、ムーラン六、〇〇〇、ワイエルズン四、〇〇〇、スヴェール二、〇〇〇）であつた。地区の町や村、それに遠くの小さな部落まで行動が組織され、そのさい森林農業労働者がその起源を切り開いた。多くの黨員や若干の地方通信員が、一定の「統一への幻想」に走る傾向があつた。G・コルナヴァンは、公式の方針に従つて、一定の評価を下し、幻想を霧消し、裏切りを告発すること、銃殺者の共和国を防衛すべきでなくそれと間断なく戦ふこと、そして、全参加者が死を賭した戦いに責任を持ち、全員が共産党に入党すべきであることを訴えた。一九三四年二月と三月の『解放者』紙の社説は、すべて「左翼デモゴグ」に対して党の警戒心を訴えた。多くの黨員は、党の同盟者に対する伝統的戦術の保持に対して若干の疑問を提起し始めた。これに対する返答としては、スターリンの『レーニン主義の諸問題』の文章、すなわち、日和見主義分子を徹底して党内から追放する必要があると引用された。当面、党の優先的な任務は、強力で規律正しい党を鍛へ上げることであつた。この精神で、五・一デーが準備されたが、結果は前述したように貧弱であり、参加者は二・二七セネスト以下であつた。地区委員会は、政治レヴェルで五・一デーの結論は出さず、一九三四年六月十二日に決議を採択し、ドリオ事件、当時の政治的諸事件に世論が与える注意方で容易とされた党の強化及び社会党支部への統一提案の再開（緊急令反対闘争、反ファシスト分子釈放）という三つの配慮の必要性を強調した（一九三四年六月十六日『解放者』紙）。社共両党の議論は、短期間、全国レヴェルで再開され始めた。一九三四年六月二十五日の党全国協議会は、ソヴェト政治の命令により方針の激変を採用した。これは、あらゆる犠牲を払つての統一戦線と組合統一とを内包する、決定的で完全な転換を意味した。公式のテーゼでは、この方針は、コミンテルン路線の最良の適用であり、かつより正しい理解に基つくものであると主張された。フランスにおける諸事件の進行が、この戦術の適用に大きく作用し、とくに、二月以降のフランス大衆の深い統一への意思が大きな意味を有していた。

第三章は、「あらゆる犠牲を払つての統一」（一九三四年七月—一九三六年五月）という見出しで論述が進められている。一九三四年六月末の全国協議会で「確認」された目醒ましい転換は、フランス共産党が一定の修復可能なテーマを前進させてフランス社会に統合されることを可能にする新しい政策の開始を告げた。そのテーマとは、闘争の統一というテーマ、国民的伝統の尊重というテーマ、それにもはや恐怖をもたらさず、秩序と合法性に忠う活動を行い、中産階層を安心させる党というテーマであつた。しかし、党が国民の「懐

に辟けるようにして入ってくることは、ブルジョア国家権力との関係で言えば、その「治外法権」に完全に手を付けたことにはならなかった。党は、依然として一枚岩的であり、かつ閉鎖的な社会として立ち現われていた。ここに、共産党組織の重大な矛盾の一つがあった。党は、国民生活内に挿入されながら、何よりも、コミンテルンの一支部として止どまり、その決定に従属していた。前述の新しい方針が決定されたさいも、それは、党内で議論され、集団的に作成されたのではなく、党指導部の若干のメンバーによる同意だけで、党外で決定された「敵命」"outrage"の果実であった。<sup>34</sup>しかも、下部党員は、熱心にこの新しい戦術を適用した。ところで、「統一戦線」という用語は、『解放者』紙の欄から急速に消え、一九三五年七月半ばからは「連合戦線」"front uni"という用法に代わった。パリと地方とは、若干のずれが存在した。例えば、一九三五年七月八日デーは、パリから全国に拡充した。社会党セーヌ県連盟の動きが、やがてシエール県、アリエ県、アンドル県へ波及した。かくして、ブルジュ市の一九三五年七月十日の集会は、シエール県労働総同盟委員会、知識人監視委員会、反ファシスト県委員会代表によって開かれ、反ファシスト連絡委員会の設置や七月二十三日の反示威行動を決定していた。共産党の新しい戦術の基軸は、フランス左翼の他の伝統的な勢力との優先的な同盟を指向しており、『解放者』紙も、例えば、社会党ミューールス大会における直接行動決議等を詳しく報道し始めた。地方指導部は、かかる決議の採択を祝福し、さらに急進社会党内の議論に関心をもち始めた。党機関紙の論説者たちは、急進社会党内では、第三十一回大会開催の前夜、かなりの数の党員たちが、社会党員や共産党員との反ファシスト行動戦線を拒否する急進党議員グループに対して失望感を抱き、「門を閉じる」態度を取ったとしている。党内には、深刻な混乱が存在し続けた。こうした脅威は、しかし、十一か月後には、最早その力を持たなかった。その時期は、パリのワグラム Wagran 広間における歴史的な大会の前夜に当たり、その大会は、共産党が人民戦線実現の鍵を持つ出来事を意味していた。やがて、急進党大会は、人民戦線への加盟に賛成していた。急進党は、当地区、とくにシエール県に深い根を持っていた(一九三五年十月二十六日『解放者』紙)。急進社会党への好意的な態度は、人民戦線の多くのメンバーから長く懐疑的に見られていた。一方、ブルジュ市の社会党リーダーは、一九三二年以降、共産党の態度に変化がないと主張した。これに対して、L.ガティニョンは、党の戦術は修正されたこと、党は、自己の任務を自覚している革命家であること、党は、ファシストの脅威に対して無気力で、おうむのように「われわれはソヴェトを希望する」と繰り返して満足してはいないことを強調した(一九三六年二月一日『解放者』紙)。統一政策の基礎は、反フ

ンシズム闘争にあった。だが、党は、単なる連合の段階を乗り越えることを希望していた。党にとつて、人民戦線は、単に左翼政府構成のために必要な議会多数派を確保することの可能な選挙連合ではなく、戦闘的な役割を持ち、一つの綱領から出発して、とくに、大衆運動に支えられる一つの協定であり、一つの約束であった。<sup>35)</sup>そこに、党が、フランスの世論に印象づけようと試みている、慎重で、明快でかつ合法的な党という、誰でも安心させる最初の定類を見ることができた。こうした考え方が、一九三六年一月末のウィルバルンヌ大会の活動を支配した。この「薫り高い」大会は、いわゆる「手を差し延べる」政策を採択し、党は、徐々にフランスの政治生活に統合されていった。ここ二年間における『解放者』紙の発展やその内容の変化等は、党が、フランス政治の伝統的な活動舞台に再統合される現象を十分に利用した結果として生まれた。同紙の力点は、兵士等から小農民、小商人職人（「火の十字架団」メンバー）及び学生に移行し、選挙を第一に配慮して、中産階級の一部を党もしくは人民戦線連合の影響下に組み込もうと努力した。そのさい、同紙は、農民問題と労働組合統一問題を二つの目標として設定した。党の支持者としての農民層は、それまでは補助的な勢力であったが、一九三五年初めからは、その地位を強化し始めた。小麦やぶどう酒関連の新法律の採択は、農民大衆に不吉な結果をもたらした。農民の一部は、その不満を右翼リーグ「農民党」による解消に期待をかけた。また、議会による緊急令の採択は、共産党が農民の最も首尾一貫した防衛者として出現するチャンスを与えた。農民問題についての党責任者は、それまで人民戦線は都市の現実態であり、農民大会の召集等農村問題は、左翼代表者に一任される程度の消極的なものであった。従つて、党の今後の優先的な任務は、農民の要求綱領の作成であり、党は、この問題で、いままでのような原則宣言だけを行うのではなく、具体的実例に依拠して戦うという姿勢を示した。例えば、シェール県森林伐採労働者県大会（統一労働総同盟系）における搾取の実態報告等がその実例とされた（一九三五年九月二十一日『解放者』紙<sup>38)</sup>）。共産党は、被搾取農民全体との統一賛同者であったが、その統一の展望はまだ組織立っていなかった。党は、社会党リモージュ大会での農業綱領と共産党のフランス農業救済綱領との近似点を基に、その展望を切り開く必要があった。党は、先ず第一に、土地労働者の直接利益を擁護し、次いで第二に、金融寡頭制に対して小農民の所有地を擁護することに重点を置いた。後者の発想は、明らかに党の最初の目的とは断絶していた。こういう精神で、一九三五年末の農業会議員補欠選挙が戦われたが、農民層の間には依然無関心の態度が支配的であった。中産階級、とくに小商人は、党側からの積極的なキャンペーンの対象であった。彼らに働きかけるさいの用語は、状況によって発展



したが、一九三五年でもまだ伝統的な議論の仕方が党内には残留していた。例えば、モンリユソンでは、「人民戦線」の表現がまだ当市の情勢と適合せず、党は、一九三六年選挙の接近とともに中産階級に対してより和解的な態度を取ったが、これは、以前の党実践に比べて完全な断絶を意味していた。また、ブルジュでは、火の十字架団員たる小商人が、党の熱心な運動の対象であった。最も広範な連合を希求する党は、学生青年（法学士、技師、技術家等）の運命に同情的であった。そのさい、党は、頑なな階級分析を適用せず、恐慌の重荷に苦しんでいるすべての者を有力な同盟者と見做す態度を取った。工業プロレタリアートを中心に、労働組合統一が進行した。一九三四年半ば以降、統一労働総同盟を中心にその統一が前進する。労働総同盟幹部は、その統一をなかなか受諾しなかった。ヌヴェール地区の鉄道労働者が、最初の合同協定を結ぶ。この統一への過程は、若干の労働総同盟幹部による妨害にもかかわらず、急速に進展する。ニエール森林伐採労働者金庫で最初の部分的成功が見られ、一九三四年十月以降、統一委員会が設置された（委員十名、両労働総同盟系各五名）。その後、全地域にわたり、多くの地区企業（ブルジュ軍需会社等）の下部組織間で、組合合同の見地から恒常的な接触が図られた。一九三五年二月二十四日、ブルジュで労働総同盟連合は、接近と統一のテーマを、組織の下部における強力な流れの圧力を受けて受諾した。労働総同盟全国指導部は、この方向に不賛成の態度を取った。あらゆる障碍が、次々に克服されていった。共産党は、その功績を与えられるとともに、同盟者以上に譲歩を行っていった。シェール県では、一九三五年十二月九日に、組合統一の調印が行われた。しかし、三つの問題が争点とされた。第一は、旧統一労働総同盟系が提起した政党権限と組合権限の非両立性に関する問題で、これは採決の結果拒否された。第二は、県連合事務所を事務所とする問題であり、第三は、常任書記は結局置かないという問題であり、統一労働総同盟側は、これらの決定にすべて従った。これら組合の再統一は、人民戦線の枠内における行動統一をより一層実現するためのスプリングボードとしての役割を果たした。当地方における行動統一の進捗は、一九三五年初め以降、より進んだ段階を記録した。すなわち、まず、一九三五年二月二十一日から、シェール県に「反ファシスト行動統一県委員会」が、十二組織（フランス社会党、人権同盟、ブルジュ反ファシスト委員会、統一労働総同盟県連合、労働総同盟県連合、赤色救助組織、社会主義青年同盟、共産主義青年同盟、共産党等）によって創設された。事務局は、十二名で構成された。決定を見た行動統一憲章のテーマは、ファシズム反対闘争、戦争及び軍事予算増額反対闘争、弾圧反対闘争、資本主義及び金融寡頭制反対闘争及びあらゆる国民連合政府反対闘争であった。一九三五年十月六日、第一

回大会が開かれ、県下全体から五〇〇名の代議員を集め、ファシズムと戦争と戦う意思を確認した。<sup>(37)</sup> レガティニョンは、共産党員にだけ、その統一の成功を帰属させていた。同年七月十四デモは、当地区で五、〇〇〇名の参加者を集め、文字通り民衆側の大勝利であった。シャートルーでは、共産主義青年同盟が社会主義青年同盟宛てに書簡を送り、三つのテーマ、すなわち、(一) 青年層の擯取を告発し、その要求を分析し、共同行動によってそれを大衆化すること、(二) 二年兵役制反対闘争を組織し、より民主的な軍隊のためのキャンペーンを行うこと、(三) ドイツ及びスペインにおけるプロレタリアートの一時的な敗北からすべての結果を引き出すことを提案し、パンと平和と自由のため若い勤労者世代の戦線を一緒に推進することを訴えた(一九三五年十月二十六日『解放者』紙<sup>(38)</sup>)。この統一運動の飛躍は、共産党の組織統一に関する議論を促進した。例えば、クラムシ(Clamecy)では、一九三六年二月二十三日、共産党細胞と社会党支部の共同集会が開かれ、全員一致でプロレタリアート統一に関する共同憲章を、最小限草案として採択した。これには、相手の譲歩が必要であった。とくに、社会党支部内では、同党左派(ジロムスキー、ピヴェール)の傾向が優勢であった。共産党は、イデオロギー・レヴェルで、ジョーレスの民衆イデオロギーで鼓吹された。マルクス及びエンゲルスの弁証法的唯物論を堅持し、かつ妥協の重要性を十分に認識していた。組織レヴェルでは、譲歩は党側によってなされ、年次大会で選出される指導機関とともに、組織内では、完全な討論の自由を尊重することを約束していた。戦略関係では、党の目的は、現実の社会秩序の完全な、革命的な転覆による政治権力の獲得、そのための労働者農民兵士評議会の独裁の創設であったが、それは何よりも徹底した階級闘争を意味していた。最後に、党は、帝国主義戦争に反対し、全面軍縮のために闘い、かつロシア革命の成果を支持する態度を表明した。<sup>(39)</sup> この憲章は、将来の一つの映像を映し出していた。この地区の行動統一の成功は、しかし、全ての困難をそれ相応に除去したわけではなかった。若干の社会党リーダーは、組織立った拒否応を示し、また、若干の共産党責任者は、セクト主義の若干の形跡を残していた。一九三四年七月以降、シェール県の党地方局及び県地区により社会党支部に対して、一定の共同行動提案がなされた。ヴィエルゾン支部だけが、即座に賛成したが、ブルジュエ支部は、一か月以上も返答が遅れ、結局その提案を連邦書記に送ると書かれていた。サンセール支部は、この提案が社会党への批判であるとして受け付けなかった。共同行動への反対は、一九三六年の選挙運動の開始までは、地方名望家や社会党、急進社会党の有力者から相次いだ。前記の選挙が接近するとともに、この反対気運は希薄となっていたが、アリエ県モンリュソン市だけは、依然緊張関係が持続したままであった。

社会党市長、ドルモア Dormoy が、とくにこの接近に反対の強い意向を表明したからである。すなわち、モンリュソンで、党地区は、社会党支部と接触を結ぶ努力を重ねたが、無駄であった。一九三四年後半、党は、六つの手紙で共同集会の決定を呼びかけたが、返答がなかった。一九三五年二月十六日、党地方地区は、最小限協定案を公表した。それは、失業手当の増額等、正当で、非常につきり要求であり、連合の基礎となり得るものであった。ドルモアは、この提案にもはっきり軽蔑の念を抱いた。二か月後になっても、当市では、行動統一はほとんど進展しなかった。一九三六年二月、立法選挙運動の開始とともに、党は、三つの統一に関する通知を社会党に発したが、返答は依然としてないままであった。『解放者』紙は、ドルモアをファシストの親友として激しく非難した。同紙は、ややセクト的態度で論陣を張っていた。ところで、このセクト主義の痕跡は、徐々に同紙から消えていった。十八か月後、党は、二つの神話(三色旗とジャンス・ダルク)を十分に利用して、フランソバ祖國への忠誠を誓った。また、社会党に対する攻撃も、やや慎重さを増していった。フランス中央の四つの県は、フランス全体の情勢をかなり忠実に映し出していた。中産階級は、これらの県でも支配的であり、新しい同盟政策は、何よりもこれらの階級へのインパクトを中心に考察すべきであった。しかし、党の地方責任者たちは、依然統一政策の成功に不信感を持っており、何よりも積極的な党員募集による党の強化を第一義的に考えていた。一九三六年二月中旬のムアン Mehan での郡補欠選挙に示されたように、党は、順風に帆を上げる形で発展した。アンドル県では、一九三六年一月だけで四つの細胞が生まれ、シェール県ではヴィエルゾン地区で三つの細胞が生まれた。既存細胞でも、加盟者が一か月で一五〇人増加した。共産主義青年同盟のメンバーは、『解放者』紙も、一九三〇年以降、その発行部数を五倍とした。党は、一種の信任状を受け取った形となり、同盟者に対しても、誠実なパートナーとなることを希望した。しかし、党独自の問題については、外部からの干渉は一切拒否し、独自の基本的公理による思想統一を堅持する、閉鎖世界の事態は崩さなかった。『解放者』紙も、協道に外れることは許されず、党指導部の公式路線と意見の違う見解は一切公表されない状況が続いた。モンリュソンでも、一九三四年十月六日、Mottレーズの出席の下に大集会が持たれ、党下部と指導部は、もう一步乗り越える努力を傾けた。共産党は、一九三四年から一九三六年にかけて、その支持者を強化し、パートナーを信用して誠実な同盟者となる努力を払った。各級選挙の結果を見れば、それが地区ごとと改訂されていることが判明する。すなわち、当時三つの選挙(一九三四年の郡選挙、一九三五年の市町村選挙、一九三六年の立法選挙)を観察すれば、共産党が、地方内で真の政治的「突破口」

を形成していることが証明される。<sup>(4)</sup>一九三四年の選挙運動は、「古い様式」のスタイルで行われた。共産党候補者だけが、プロレタリアートの唯一の擁護者であると宣伝され、ブルジョアジーはもちろん、社会黨員や急進社会黨員もその攻撃の対象となり、一九二八年時より得票減を結果した。一九三五年の選挙運動は、これとは違った視角で行われた。行動統一の進展に伴い、党は、独立の政治勢力として「数えられた。」しかし、党は、統一ブロックには溺れず、市町村「要塞」を基盤にして、党独自の綱領及び固有のリストで選挙に臨んだ。当時、行動統一の基本的な問題（植民地問題、ブルジョア民主主義の性格、資本主義制度内での国家防衛、権力獲得とプロレタリアート独裁）で、社共両党の間には、深刻な意見の相違が仄々していた。フランス社会党は、ローマ協定に賛成し、自衛軍事計画に棄権の態度を採ったため、党は、共同リスト作成を拒否した。しかし、二回投票の間、『解放者』紙は、社共統一戦線を真剣に訴えた。結果は、多くの市町村で左派が勝利を収めた。共産党も、量的に進歩した。一九三五年十一月以降、党は、「共和制防衛」のスローガンを大衆化していった。ファシストに対抗し、民兵と労働者の武装で反撃するというトロツキー派の主張に対して、党は、それは革命時に問題となるテーマであり、当面はファシストに対抗して、規律正しい、組織的な大衆行動を取るよう主張した。この時点で、地方における党は、左翼統一を留保条件なしで支持し、かつその誠実なパートナーとして行動するようになった。一九三六年の選挙時には、この「ニューロツクナ」党が、その力を完全に発揮した。第一回投票では、単独候補が受諾されなかった。人民戦線諸政党間には、依然意見の相違が存在していた（ソヴェト権力の創設、ソ連邦の擁護、金持ちに支払わせる必要等）。しかし、共産党は、人民連合綱領を保持する姿勢を貫き、その力点を最大限人民戦線運動に協力することに置き、第二回投票では、最も有利な候補者へその票を集中する方針を取った。共産党候補者は、G・コルナヴァンら七名で、第一回投票の結果、党の戦術が報われ、党は、三つの県（シエール県、アンドル県、ニエーヴル県）全体で成功を収めた。ところが、郡投票制システムが、党から多くの議席を奪い、最終的には、ブルジュのG・コルナヴァンだけが当選を果たした。急進社会党の票が大幅に減り、共産党の成長が目立った。党は、議会多数派内の一支持勢力として、そのパートナーと対等の扱いを受ける地位に上った。しかし、党は、その独自の党目的の一部を犠牲にしようとはしていなかった。

最後に結論の部分では、大要次のように述べられている。当地方内における統一の複雑で混沌とした問題に関連して、共産党の発展を総括することは、一つの賭に相当する。先ず、筆者は、『ユマニテ』紙を連続して読み、六年間に再生したテーマを調べ、それらを『解

放者』紙で発展したテーマと比較検討し、その類似性と差異性を正確に引き出すことが必要であったとしている。次に、『社会党員やピュピストのテーゼを、その地方新聞を通して検討することが必要であったとしている。そうすることによって、これらのグループと共産党との関係に関する地方的反響が、非常に違った角度から取り扱われたであろう。共産党の出版物だけを検討していても、問題のテーマに関する不完全な思想しか与えられないであろう。最後に、これら色々な組織の一定数の指導者や一般党員を発見し、その豊富な政治的経験を再現させることが必要であったとしている。こうした面々は、この研究ではほとんど不在である。ただその一人とだけは接触した。彼が、『解放者』紙のコレクションを労働組合運動史センターに提供しており、政府弾圧のために一九三一年に当地方を離れている。ところで、『解放者』紙の購読だけでも、一定の一般的考察には是非必要である。同紙は、『ユマニテ』紙に比べ、共産党の戦略戦術の大転換に関連した問題でそう奇異な記事は出していない。「階級対階級」、「社会ファシスト」、「統一戦線」、「連合戦線」、「人民戦線」といった、最も注目すべき同時期または同時期の運動が、実際に表われたり消えたりしている。党指導者が担当する一頁目の社説と、以前からの方針に執着する地方情報との間には、稀に一定のずれが生じていることが注目される。とくに、一九三四年以降、あちこちでその幾つかの例が見られるが、例えば、一九三四年六月三十日号で、党指導部は、あらゆる犠牲を払って統一をという方針を立てているのに、セクト主義の痕跡が、あらゆる統一への譲歩を拒否している点がはつきりと内面記事に表われているのが、極めて教訓的である。党の政策は、指導部だけで決定され、下部自体は何ら相談を受けていない。党の方針は、党員大衆によっては作成されず、若干の特権的地位にいる者が、文字通り「下達させていた」。党の官僚的実践や突然の態度変更は、党の統一には影響を及ぼさなかった。一般党員は、服従と完全な規律の保持を示していた。昔教師、トロツキスト、ドリオ主義者は、何人かの個人にしか過ぎず、党がプロタリアートに行使するヘゲモニーは、これによって問題にもされなかった。四県でも、若干セクト主義の痕跡が見られたが、それは、バルベーセロール事件と恐らく関連していたであろう。その痕跡はかなり長く、とくにモンリュソンで見られたが、これはさらに党内史との関係を検討すべきであろう。前述の時期区分には、若干不正確な点があった。一九三二—一九三四年の中間の時期を、「不確実性の時期」とした点が、その例である。ここでも、党指導部は、コミンテルンの勧告に忠実で、「階級対階級」戦術を維持したのに、党の下部は、統一政策の勝利を希望し、その深い必然性を感じてはいたが、ソヴェト制度への無条件的忠誠のために、その具体的実現へは「進まない」という、ずれが、

最もよく表わされていた。下部と指導部の完全な統一への絆が、最大の問題点であった。ところで、党の發展は、決して自然発生的ではなかつた。歴史は、国民的共產主義のイメーシとともに、M・トレーズの個人的役割を前面に出している。党の大衆内での影響力の増大、それに党とパートナーとの約束の尊重にもかかわらず、党は、完全にゲッター状態から脱出できなかった。党は、あくまでコミンテルンの一支部であり、その指令に完全に従属していた。一九三九年の独ソ協定調印の時に、そのことが、はつきりとした形で現われた。<sup>(4)</sup>

## B S II カーマノの論稿

第二の論稿は、S・カーマノ Santiago CAAMANO の筆に残る「共產党出版物及び社会党出版物を通して見たヒットラー出現の原因と結果（一九三三年一月―一九三四年七月）」二五〇頁で、これは、ヴァンサンヌのバリ文・人間科学部に提出された修士号論文であり、C・ウィラル Claude WILLARD 教授の指導を受けたものである。

先ず、序論の中で、この論文の主題が述べられているが、ヒットラーの出現に対する社会黨員と共產黨員のウィジョンを比較して検討すること、もう一つは、労働者の統一問題をこれら相方から想起して跡付けることに主眼が置かれている。この期間、国際的にも国内的にも、かなり不安な政治的経済的背景が横わっている。ヒットラーの出現と一九三四年七月の「行動統一協定」の締結という二つの事件の間には、十八か月の歳月が流れているが、それらには果たして因果関係があったのだろうか。この因果関係が実在したのかどうかについて、労働運動の分裂状態下の社共両党は、それぞれに教訓を引き出し、そうして協定の基礎固めを行い、やがて「人民戦線」形成への道を切り開いていった。とくに、その原因を説明し、それがどういう位置を占めていたかが、研究の前提となり、また、結果を比較することによって、その一致点や不一致点を説明することが、この研究の方向づけに重く押し掛かっている。資料は、社会党の月刊紙『ポピュレール』紙と共產党の月刊紙『ユマニテ』紙が主である。それに、各理論誌に載っている各種論文が参照される。後者は、日刊紙よりも完全で、詳細な議論の素材とすることができる。用語は、ヒットラーの観察方法、及びその性格づけの方法に関して選別される。使用されているトーンの辛辣さでは、『ユマニテ』紙の方が数段優っている。これに対し、『ポピュレール』紙は、やや控え目で、ヒットラー運動の性格づけでは、この運動のテロリスト的性格に注目しており、この点は、共產党との一致点であった。『ポピュレール』紙の一つの用法

は、この運動の残忍性を強調している点であり、このテロルがファシスト群の行為であり、また独裁の行為であり、それは、文明との断絶を意味し、また中世への復帰を意図していると指弾する。テロルの波を伴うナチスの行為については、両日刊紙が一致して認めている点である。一つの違いは、『ユマニテ』紙が、このテロルに対する労働者の抵抗を強調しているのに、『ポピュレール』紙には、それが見られないという点であり、もう一つの違いは、ヒットラー運動の概念自体に関して、用語のレヴェルでの明白な違いであった。すなわち、『ポピュレール』紙は、ファシズムを特定のナショナリズムと性格づけ(ルバの言う狂信的ファシズム、ブルムの言う民族主義的ファシズム)、また特定の人権主義と性格づけ、この現象の複雑さのためにそれを性格づけることが極めて困難であるという立場に立っていた。『ユマニテ』紙の方は、そうではなく、ファシズムとヒットラー主義と資本主義とはそもそも単一の同じものとして把握しようとした。ドイツのテロルについては、社共両党によつてともに強調されたが、『ユマニテ』紙が、ヒットラー主義の図式的定義を行ったのに対し、『ポピュレール』紙は、その民族主義的、人種主義的性格を強調した。<sup>(42)</sup>

第一章では、ヒットラー出現の原因が論述されている。先ず最初に、ヴェルサイユ条約とフランス帝国主義の政策という項目が立てられ、社共両党とも、フランス帝国主義の政策を批判し、そこにヒットラー出現の本原的な原因の一つを認めることで一致している。このテーマは、共産党出版物の方が頻度が高く用いられている。ただ、その責任に取り組む方法については、社共両党間に違いがある。共産党は、ヴェルサイユ条約がヒットラー出現の原因であり、労働者が自国の帝国主義に対して行う闘争の原因であると論じ、ドイツ労働者との連帯を主張するのに対して、社会党は、条約自体は訴状に載せず、またフランスの政策に反対する闘争は訴えないで、むしろ別の政策を取ることを暗示している。他方、共産党員は、ヴェルサイユ条約批判を、第一次大戦の分析を基礎に、社会党がフランス帝国主義を支持したとして非難するために、利用している。一連の社会党出版物の中で見てみると、社会党は、第一次大戦で勝利した国々の政策について程、ヴェルサイユ条約自体を批判せず、ドイツで生まれた若い民主主義は、まだ堅固な大衆的基盤を持っていない、大戦での敗北と講和条約に帰責される民族感情の異常な誇張が見られる点が強調され、何よりもヴェルサイユ条約の帝国主義的性格を指弾している。また、共産党出版物の中で見てみると、前述したように、帝国主義諸矛盾の反映としてのヴェルサイユ条約が、ヒットラー出現の本質的原因の一つとされており、とくに、党機関誌『カイエ・デュ・ポルシェヴィスム』のはとんどの号が、一貫してその主張を行っている。そし

て、条約に反対する闘争は、フランス帝國主義を弱体化し、ドイツのプロレタリアートに援助を与える目的を持つという、アムステルダム・ブレイエル大会の宣言が援用された。コミンテルン機関誌紙は、とりわけ経済的諸条件を重視し、ヴェルサイユ条約とともに、経済恐慌と労働者の分裂とに注意を喚起した。さらに、フアンズムの民族主義及び排外主義の側面が強調された。ところで、また、ヴェルサイユ条約反対闘争の重要性について、『ユマニテ』紙等は、余り良くその内容を明示してはいなかった。両党とも、ヴェルサイユ条約が、ドイツのプロレタリア大衆に重い負担を課し、ドイツ人民に大きな屈辱を与え、若い共和制を極めて不利な状態に置いておき、これらが、ヒットラー主義にその基盤を与えている点を強調した。ところで、社会党が、フランスを含めた民主主義諸国が、ドイツの若い共和国に与えるべき援助に力点を置いて主張するのに対して、共産党は、ヴェルサイユ体系に反対する闘争に強調点を置いて主張するという、微妙な差異が見られた。<sup>(43)</sup>次に、経済恐慌とその結果という項目が立てられ、何よりも経済恐慌が、ドイツ人民に悲惨な生活と失業とを産み出している点が力説されている。社会党出版物の中では、ヒットラーの支えが、この経済恐慌そのものであり、青年層がその餌食となっており、社会主義の根絶がその目標とされている点が強調されている。他方、共産党出版物の中では、経済恐慌とヴェルサイユ条約の連結性が強調されており、とりわけ、ヴァイマル共和制下の政策の弱点は、崩壊期にある資本主義体系の維持を目標としていることであると力説している。<sup>(44)</sup>コミンテルン機関誌の論調もほぼ同一であり、さらに、社会民主主義の労働組合指導等にも、その責任の一端が負荷されている。次に、労働運動に反対する闘争の側面については、社共両党とも、ヒットラーは、ブルジョアジーにより、テロル手段で権力の座に押し上げられ、第一義的に労働者階級の搾取を強化する目的を持っていると主張されている。社会党出版物の中では、ヒットラー主義がブルジョアジーの掌中にある道具であるとされ、他方、共産党出版物の中では、ドイツ共産党初の労働者組織の破壊及びボルシェヴィズムへの戦争に帰結するのが、ヒットラーの取るテロル強化の道具である。社会党リーダーは、フアンズムに結果しており、社会民主主義は、労働者の分裂を結果していると論難する。ヒットラー主義は、共産主義で教育された労働者に対するブルジョア階級の最後の形態であると論断している。続いて、ブルジョアジー、工業家及び地主の支えという側面について、社共両党ともに、これらグループの実質的な援助を認めている。一つの違いを挙げれば、社会党が、この支持を、権力を目指して各党派が行う闘争の枠内で扱っている点であり、従って、ヒットラーをドイツの政治生活内に統合する試みの中に位置づけようとしている点である。社会党出版物の中



では、大工業と土地貴族が、ヒットラーを政治的、金融的に支持している点が強調されており、共産党出版物の中では、工業界が、ヒットラーの支持と同時に各種の圧力を加えている点に注目している。M・カシャンらは、一九三四年のフランスの情勢をドイツのそれと比較し、フランスの右翼運動が、フランス流のファシズムを目指している、大金融資本家によって指導されているラ・ロック一派やコティ一派らの運動は、ヒットラーと同じ社会計画を論議かつ完全に金融独占によって買収されていると指摘する。<sup>(45)</sup> 国民ファシズムは、労働者の眼から見れば、資本の完全な手先であった。続いて、資本主義から生まれたヒットラーという側面について、先述した、大土地所有や重工業のヒットラーへの支持という言及は、一九三三年二月に最も頻繁に行われている。これは、ヒットラーの特別な一側面、すなわち、ヒットラーが資本主義の代表者であり、かつブルジョア権力の一形態であるという側面を強調するものであって、それは、とりわけ共産党員にとって真実味を持っていた。社会党出版物の中では、こうしたヒットラー運動の分析は、党内「左派」グループによってなされており、社会主義労働者インタナショナル I S O も、ヒットラーと資本主義を同一視していた。ブルムらは、ヒットラー現象が権力の新しい形態を示すことを認めたが、それは資本主義と社会主義の中間の時期に相当すると主張した。他方、共産党出版物の中では、『ユマニテ』紙や『カイエ』誌、それにコミンテルン機関誌(とくに、第十二回及び第十三回プレナム)等で、社会ファシズムが、ファシズムを小ブルジョア独裁と規定するのに対して、一貫してボルシェヴィズムは、ファシズムを金融資本の独裁であるという主張を押し通した。最後に、大衆の支持という側面について、社共両党とも、ヒットラーがドイツ住民の重要な部分、すなわち農民や中産階級によって支持されていることを認め、両党は、一九三三年、とくに一九三四年にフランスの中産階級に働きかけを行うことに最大の力を置く論陣を張った。社会党出版物の中では、ヒットラーがドイツ小ブルジョアシーの民族主義的感情や反資本主義的願望をフルに活用している実態を描き出し、他方、共産党出版物の中では、これらの支持が、経済恐慌及び社会民主主義の政策に起因している点が鋭く論難されている。続いて、ドイツ諸政党の政策という項目が立てられ、先ず、ドイツ社会民主主義の政策が如上に乗せられている。先ず、共産党出版物の中では、ドイツ社会民主主義の政策が、ドイツ大衆に幻滅を生じさせ、彼らにマルクス主義に対する信頼を失わせ、そして彼らをヒットラーの腕の中に押しやったとして批判した。この批判は、共産党員にとって本質的な批判であり、本稿の取り扱かう十八か月間の『ユマニテ』紙における中心思想であった。<sup>(46)</sup> この批判は、当然フランス社会党政策の批判をも支えていた。共産党による社会民主主義

全体に対する批判は、何よりもドイツ情勢の分析の結果から生まれ、ヨーロッパで最強を誇ったドイツ社会民主党の経験から抽出されていた。社会民主主義は、ブルジョアジーの譲歩政策によって、階級闘争を放棄し、一言でいえば社会改良主義政策に徹していた。一九三三年五月十五日号の『カイニ』誌は、「第二インタナショナルの第二の死」について論じた。『ユモニテ』紙では、その中の有意義なものだけが取り上げられており、先ず、一九一八—一九一九年における社会民主主義の態度が想起され、ヒットラーが権力に到達できたのは、第一次大戦後、革命がドイツ社会民主党によって比較されたからであると論じた。次に、社会民主主義の反革命的な政策が想起され、反共産主義がその一つの存在理由であると論じた。社会民主主義の反共産主義が想起され、その革命、プロレタリアート独裁及びボルシェヴィズムに対する恐怖及び憎悪が論じられた。続いて、階級闘争の放棄が論じられ、社会民主主義がブルジョア政府を支持し、労働者階級の現実の利益を裏切り、労働者に対する反動的ブルジョアジイとの統一戦線政策を指向している点が強調された。ドイツ社会民主党は、徹底した階級協力政策を取っている。これは、ファシズムの温床を準備している。社会民主主義は、プロレタリアートの政治的武装解除を準備するとともに、諸階級を超越した国家を展望し、また、資本主義の合理化に賛同すると同時に、労働者に対する組織的権取政策に協力している。絶対的民主主義 *democratie formelle* の信奉は、民主主義の防衛と同時に資本主義の防衛をも意味していた。ブリーニンズをヒットラーよりも、また、ヒットラー宰相をヒットラー独裁者よりも、より小さな悪 *un moindre mal* とする政策も論じられた。最後に、ヒンデンブルグに対する社会民主主義の支持は、ヒットラーに対するより小さな悪の誣捏と見做された。次いで、社会党出版物の中では、この種の批判はやや困難ではあったが行われた。批判を含むテキストは、余り多くはなかった。ブルムらも最初困難を示し、ドイツ社会民主主義の政策を直ちに再追はしなかった。やがて、ヒットラーが権力を獲得するや、彼らは、ドイツ社会民主党の反応、例えば武装抵抗やゼネストの欠如を確認するにいたった。共産党が、社会民主主義の本質自体を非難するのに対して、ブルムらは、戦術上の欠陥について、例えば、ドイツ社会民主党が革命を実行しないで講和を結んだこと、ドイツ社会民主党及び労働指導部が、独裁者と妥協しながら富や自由を救出できると幻想したこと等を非難した。J・B・ルバは、より批判的な態度を取り、ドイツ社会民主党が、民主主義の外見を持つブルジョア諸政府を一貫した態度で支持することによって、ヒットラー・ファシズムの前進を阻止できると信じていたが、それは全く誤った道を進む結果に終わった。また、社会民主党は、政府連合、取引、内閣の支持によって、ヒットラーの危険を避け

得ると考えた。社会民主党の臆病さのため、権力の座にあっては、社会民主黨は、大土地所有、トラスト及び資本主義的独占に全然手付け得なかった。権力外にいる時の社会民主党の支配的な思想は、隠微な連合政策を実行しながら、反動諸政黨、次いでヒットラー政黨が、政權へ接近するのを阻止することであった。<sup>(47)</sup> フランス社会黨左派は、社会民主主義の政策に最もはつきりとして批判的であり、社会主義インタナショナル同様、ドイツ社会民主黨の不活動及び日和見主義的精神状態を非難した。ドイツ社会民主黨員 G. ゴールドシルド Gaston Goldschild も、ドイツ社会民主黨に対して、三つの点を非難した。第一は、その意思の欠如や臆病さで、ドイツ革命を遂行しなかつたこと、第二は、当時権力の座にいたのに経済権力を獲得する努力を払わなかつたこと、そして、第三は、政治権力を共有したと、労兵評議会でなく、議會主義をあくまで固執したこと、を挙げている。<sup>(48)</sup> 次に、ドイツ共産黨の役割が論じられているが、先ず、社会黨出版物の中では、当然ドイツ共産黨の行動が批判を招いており、社会黨員は、主として、共産黨の統一の拒否を非難している。社会民主黨のより小さな悪に対して、共産黨の場合には、最悪の政策という形容詞が使用されている。共産黨は、民主主義的諸自由に対する輕蔑や、労働者階級の主要な敵をファシズムではなく社会民主主義に求めるといった類いの幾つかの大きな誤りを犯している。フランスでも、社会黨や労働総同盟指導部が、その敵対者に指定されており、それはモスクワで決定された戦術に基礎を置いており、共産黨のベクトル主義及び恒久的錯誤に数えられている。次に、共産黨出版物の中では、『ユマニテ』紙が、概してその誤謬よりも英雄的闘争を賛えているのに対して、批判は、『カイエ・デュ・ボルシェヴィスム』紙の中で見られた。それも、根本的な批判ではなく、各因の責任に帰せられる、コミンテルンによって決定された任務の適用もしくはその悪しき適用に対する批判という形を取っている。J. ペルリオーズがとくに分析しているように、ドイツ共産黨は、客観的可能性に歪れを取り、大企業内に根を持たず、組合大衆の活動に手を抜いている。E. テールマンも述懐しているように、大半のストライキが失敗に終り、大衆的政治ストライキに有利な精神状態は作られず、統一委員會や闘争委員會等の工場大衆を指導する組織に関する實際的な政策は企てられなかつた。こうした不十分な活動は、ドイツ共産黨の自己満足的樂觀論にその基盤を持っていた。反ファシズム行動統一の実現も、組織的活動の欠如によって結局は陽の目を見なかつた。次に、カトリック中央黨に関しては、社共兩黨とも、この黨の政策が、ヒットラー出現の原因の一つとして扱え上げられている。先ず、共産黨出版物の中では、共産黨は、この支持關係については特別に注目せず、ブリューニングは、カトリック中央黨の代表としてではなく、ブ

ルジョア民主主義の代表として批判を加えている。また、社会民主主義は、ブリューニングを支持することによって、連合戦線を拒否している点も批判されている。次に、社会党出版物の中では、社会党は、ブリューニング政府の政策それ自体は訴追せず、中央党は、議会レヴェルで形勢を有利にするためドイツ社会民主党に依拠していると判断された。次に、ヒットラーとの取引について、他の右翼諸政党の発言その他が注目されている。共産党出版物の中では、ドイツの指導者、例えば、ブリューニング、パーベン、シュライヘルとヒットラーとの間に、多数の取引があったことが引証されているし、社会党出版物の中では、これとは全く別の眼で色々な術策を見つめ、数多くの例を報告しているが、とりわけ、パーベンやフーゲンベルグが、ナチス党の統合に大きな注意を払っていた事実を指摘している。最後に、労働者の分裂の面について、社共両党は、ドイツのプロレタリア政党の政策の一面面、すなわち、労働者の分裂に注目し、相互にその責任を問い合っている。先ず、共産党出版物の中では、統一戦線のアピールが、非常に頻繁に掲載されている。とくに、『ユマニテ』紙の頻度はおびただしく、ドイツにおける労働者の分裂を仄かし、統一戦線や行動統一のアピールでその結論を出すと同時に、共産党が作り出す統一戦線の概念をはっきりさせる努力を行っている。共産党は、社会民主主義がそのすべての政策でヒットラー出現に責任を負っているという、極めて厳しい態度を貫いた。すなわち、ドイツ社会民主主義は、ドイツ大衆の戦う統一戦線を遷延させており、第二インターナショナルの指導者も、闘争と反ファシズム連合戦線を制止している。ドイツ社会民主主義は、反ヒットラーの闘う統一戦線を拒否し、それを解体しており、ドイツの労働者を分裂させて、ファシズムへの道を開拓していると鋭い口調で非難している。共産党は、ドイツの諸事件を参考にして、フランスの労働者階級に統一を実現するよう切願した。階級対階級戦術等の古いテーゼはまだ残されているもの、統一戦線は、下部組織で、しかも行動における統一を通して実現しなければならぬ。ヒットラーの出現後、『ユマニテ』紙は、労働運動における抵抗と社共労働者間の闘争同盟に最大の力点を置いて論陣を張った。統一戦線は、何よりも行動で実現されねばならない。社共労働者統一戦線は、反ファシズム共同行動を通じて実現されねばならないと繰り返えし主張された。次に、社会党出版物の中では、社会党は、労働者の分裂がヒットラーの賭けを成功させていると判断し、モスクワの希望に依る共産党の政策にその起源を求めている。ところで、その証拠固めに関して、『ボビュレル』紙は、そう頻度多く言及してはいない。ドイツ共産党は、労働者の分裂と兄弟党を見殺しにする闘争の方法を放棄すべきであり、そのためには、先ず何よりもスターリンの後見体制を揺さぶる必要がある。モスクワは、労働

働者の分裂を維持する方針を取っており、共産党は、その命令に応じた行動を取っている。社会党内左翼少数派は、共産党の政策において、主要敵がファシズムではなく社会民主主義に指定されている点を鋭く指摘している。また、M・ピウエルらは、共産党が労働者の統一を希望せず、単独でプロレタリアートを指導するというその頑なな意思が、ドイツで見られた極めて残忍な経緯でも敗北せずに残留している点に注意を喚起した。労働者の分裂に終止符を打ち、プロレタリアの統一、すなわちプロレタリア勢力の結集を行うことが、何よりも緊急な課題とされた。しかし、社共両党による統一へのアピールは、それぞれ違った響きを持っていた。

第二章は、ヒットラー出現の結果という見出しで、論述が進められている。先ず最初に、労働者諸党の破産という項目が立てられ、先ず、共産党出版物の中では、共産党は、ヒットラーへの屈服がカトリック中央党と、とくに社会民主主義の仕業であると強調され、ドイツ共産党だけが、社会党系労働者の助力をも得て、ヒットラー主義に抵抗する唯一の党であると力説されている。『ユマニテ』紙は、その例証として、パンフレット、デモ、ストライキ、共産党への襲撃及び共産党の抵抗の事例を挙げている。ヒットラー主義に対する社会民主主義の屈服及び降伏政策の結末が論及され、とりわけヒットラーへの降伏及びヒットラーとの協力政策が鋭く追及されている。改良主義的労働組合の役割、ゼネストの不発、社会主義労働者インタナショナルの役割、国際労働組合連盟の役割等、総じて「第二インタナショナルの第二の死」が鋭く論難されている。次に、社会党出版物の中では、社会民主主義の余りにも明白なヒットラーへの降伏が、社会党側の多くの考察を引き起こしている。ドイツ社会民主主義の崩壊やドイツ労働組合の屈服は、ほとんど抵抗なしに、しかも勇氣の欠如とともにもたらされた。一方、共産党の受け身の態度も非難された。ブルムらは、共産党大衆が、街頭行動やストライキを初め、その他の如何なる抵抗もせずに、一挙に人種主義へ移行していったと論じた。社共両党とも、カトリック中央党の政策を批判する点では一致していた。さらに、社会民主主義の抵抗の欠如も強調され、とくに労働組合の屈服が強調された。共産党にとって、これらの屈服は、社会民主主義政策の当然の結末であるとされ、他方、社会党にとって、これらは単なる戦術上の誤りであると評価された。こうした批判は、ヒットラーに対する一定の有利な抵抗をドイツ社会民主主義が爆発させた後に、いっそうより明確にされた。それはまた、共産党の「受動性」と、より一般的な形では、ヒットラーの出現に責任のあるドイツ大衆の受動性の強調を忘れない形で、社会民主主義政策をより容易に批判することを可能にした。それはさらに、大衆に参加の用意のあった抵抗を組織しないで、その果たすべき役割に失敗した社会民

主義に對する一定の攻撃をも含意していた。<sup>49</sup>次に、ヒットラーは國際的行動を有利にし、戦争の危険を強化するという項目が立てられ、先ず、國際的行動について論及がなされている。社共両党とも、國際的行動、とりわけフランスの行動が、ドイツにおけるファシズムの出現から引き出す一定の方策に対し、一致して警戒の態度を取っている。社会党出版物の中では、社会党が、ドイツ・ファシズムの生み出す事例に不安を感じ、その方法がフランスでも適用できないかどうか、フランスのブルジョアジーが真剣に考えている点に注目している。社会主義インタナショナルも、フランス資本主義及びフランスの社会的保守派の持つ、この危険性を強調している。党内の左翼少数派は、ヒットラー主義の勝利が、各国で民族主義的及び排外主義的精神の高揚を招き、かつ戦争の危険を倍加していると指摘し、それに対抗する労働者の団結を強調している。共産党出版物の中では、ヴェルサイユ条約とヒットラー運動の反撃とが連結されており、またフランスのナショナリズムが一段と育成されている点が注目されている。フランスのブルジョアジーの中で、ファシスト分派が増大しており、それは、右翼反動派に留まらず、急進黨員や社会党指導部にも及んでいる。相互に敵対する帝国主義諸国では、戦争と、民主主義のヴェールをまとった国家機関のファシッシュ化の氣運が強まっている。かくして、フランスでは、フランスの排外主義的な感情を断ち切り、フランスのブルジョアジーに対抗する大衆の反ファシッシュ的感情を外らせない手立てが必要となる。次に、戦争の危険について論及がなされている。先ず、共産党出版物の中では、フランス帝国主義の政策が告発されており、とりわけドイツ・ファシズムと同様に帝国主義戦争の準備に狂奔していると指摘されている。この戦争の反ソヴェト的性格も指摘され、ドイツ・ファシズムが反ボルシェヴィズムの傭兵としての役割を果たしていると指摘している。共産党にとって最も重要なことは、準備されつつある戦争の帝国主義的性格を明白に告発することであり、この戦争の民主主義的性格について云々することは、一種の畏であるとして警戒の必要を指摘した。共産党は、この種の戦争は、フランス帝国主義による民主主義防衛のための戦争ではなく、金融寡頭制のための征服と掠奪の戦争であると論断し、この点を包み隠している社会党の態度を非難している。次に、社会党出版物の中では、戦争の脅威が、数々のアピール文の最後のもので注目されており、それは多少とも長期にわたる危険として論及されている。社会黨員は、戦争の危険は、資本主義を自己体によって生み出されること、そして、この危険は、ファシスト諸政府（ドイツ、イタリア、ハンガリー、ユーゴスラヴィア、バルカン諸国）によって加重されている点を鋭く指摘している。その中でも、ドイツ・ファシズムが、自由と平和にとつての最悪の危険を代表している。ヒットラー

は、とくにソ連邦に脅威を与えている。従つて、ソ連邦による労働者の分裂政策は、その放棄の方向に仕向ける必要があると主張されている。続いて、ドイツにおけるテロルという項目で論述が進められている。社共両党とも、ヒットラーが、恐慌脱出のために力で労働者階級の抵抗を粉砕する、ブルジョアジーの道具であることを認めている。社共両党の出版物では、ドイツにおけるテロルの波が描き出され、毎日、ドイツからの乱闘、暗殺、弾圧手段、逮捕、それに収容所監禁等のニュースが伝えられている。また、多くの論文で、ヒットラーが、死刑執行人、暗殺者、血腥い人間、それに人種主義者として取り扱われている。『ポピュレール』紙では、反ユダヤ主義の示威に關するドイツのニュースにかなりのスペースが割かれている。社会党指導部やジャーナリストは、ヒットラー主義を人種主義の運動として定義する印象を強めている。また、『ユマニテ』紙でも、ナチズムのこの側面は過小評価されず、ヒットラーは、人種主義のリーダーと目されている。さらに、『ユマニテ』紙は、それ以上に、ヒットラー主義により労働運動、とりわけ共産主義運動に対して加えられた闘争に強調点を置いている。社会党出版物でも、社会主義運動、逮捕、それに新聞の禁止等、弾圧政策の解明に力点を置いている。共産党が最も中心的な弾圧の対象であったため、共産党出版物では、街頭、ベルリン労働者街区、それに工場等における、英雄的なドイツ共産党の抵抗を取り扱っている。とくに、『ユマニテ』紙は、社会党系労働者をも結集しての反ファシズム闘争の「統一戦線」に最大の力点を掛けた。『ポピュレール』紙の記事にはややドライな面があつたが、『ユマニテ』紙の場合は、ドイツのテロルが、それと抵抗して行われる闘争と結び付けられて参照されていた。ライブチヒ裁判やテールマン釈放に關しても、この両紙の間には、一定のずれが存在していた。最後に、ドイツの教訓という項目が立てられている。社共両党とも、ヒットラー権力の色々な要素について告発を行い、この権力の出現に対する熟考とともに、一定の教訓を引き出す努力を払っている。社会党出版物の中では、社会党員が、ためらわずにドイツの諸事件を想起し、党内の議論を支え、資本主義を告発し、統一を訴え、そして、より一般的な問題、例えば社会党政策を切実に訴えている。フランスにおける一九三四年二月事件のさいにも、ドイツの情勢が早く想起され、それが深い反響を持っている点が活用された。二月九日付け『ポピュレール』紙によるゼネストの呼びかけは、その素早い反応の一つに数えられた。共産党出版物の中では、ドイツの教訓が、多数の例証を伴つて論述された。共産党員は、ドイツの事例を通して、より小さな悲劇の社会民主主義、ブルジョア民主主義、さらには資本主義に比重を掛けて批判を加える議論を生み出し、そして、行動統一、団結の必要性、それにプロレタリアート統一のアピールを支持

する論調を堅持した。ファシズムの力に対しては、プロレタリアート統一の力を行使すべきであると論じられた。当時はまだ、ブルジョア民主主義がファシズムと闘わず、むしろそれを準備し、自らファシショ化しているというテーゼが堅持されていた。この種のテーマは、共産党出版物の方が、社会党出版物よりもずっと豊富に取り扱っていた。

第三章は、色々なテーマ、それらの重要性、それらの個々の重要性及び採択された方法について、概略、その説明が行われている。先ず初めに、色々なテーマとそれらの重要性について論述が進められている。ヒットラーの出現に関するそれぞれのテーマの意味や、その責任の所在等が問題とされる。社共両党の日刊紙における社説や論説で、ドイツの諸事件、他の事件に関するドイツのケースの参照、さらにヒットラー出現の原因と結果について、それぞれのテーマの頻度が問題となる。そのテーマは、正確に限定する必要がある。例えば、「経済恐慌とその結果」というテーマについても、経済恐慌それ自体に帰着する問題と恐慌中の資本主義に帰着する問題との区別は困難である。一つの論説における一つのテーマの頻度も、幾つかの問題を提起する。例えば、社会民主主義政策を検討する論説において、その批判は、社会民主主義政策の色々な側面についてなされる。ここでは、批判の側面についてのそれぞれの頻度ではなく、全体的な頻度だけに注目せざるを得ない。この方法には、しかし不便が伴う。テーマが混淆していれば、それだけ測定が不可能となる。従って、考察の対象は、はっきりヒットラーの出現あるいは少なくともヒットラー出現後のドイツ情勢を参照できるものしか含まないテキストだけに限って行われる。一つのテキストにおける一つのテーマを頻度一点として計算する。社共両党の日刊紙について、その価値尺度を同一にすれば、比較が可能となる。検討の結果は、図表またはグラフとして表出する。そして、色々なテーマを、最も頻度の少ないテーマ(頻度が各日刊紙の平均頻度の五〇%以下のテーマ)、平均頻度のテーマ及び最も頻度の多いテーマ(平均以上の頻度のテーマ)に分類して表50)すれば、次頁の表のような図式が得られる。先ず、共産党出版物における色々なテーマが分析されている。先ず、最も頻度の少ないテーマが取り上げられている。ヒットラー出現の原因の中で、図が示す通り、ドイツ共産党の政策は、『ユマニテ』紙では、全然訴追されていない。大衆の支持は、より小さいテーマとなっているが、実際に『ユマニテ』紙全体を通読した印象では、このテーマはグラフよりも豊富な内容を持つているように見受けられる。それは、ドイツの小ブルジョアジーや農民の破滅の度合いと関連がありそうである。一九三三年七月にカーブが若干上昇しているのは、この時期にフランス社会党第三十回大会が開催されており、ドイツの社会民主主義政策に対す



フランス人民戦線研究の新視点(一) (平田)

ユ マ ニ テ					
ヒットラー出現の原因			ヒットラー出現の結果		
	(1)	(2)		(1)	(2)
ドイツ共産党の政策	0	0	戦争の脅威	14	13%
大衆の支持	18	17%	国際的反動	17	16%
経済恐慌	23	22%			
労働運動反対闘争	26	25%			
地主及び工業家の支持	36	34%			
資本主義から生まれたヒットラー	84	79%	ドイツの教訓	62	58%
ヴェルサイユ条約	91	86%	社会民主主義の破産	75	70%
労働運動の分裂	170	161.5%			
ドイツ社会民主党の政策	390	368%	テロル	495	467%
ポ ピ ュ レ ー ル					
ヒットラー出現の原因			ヒットラー出現の結果		
	(1)	(2)		(1)	(2)
ヴェルサイユ条約	7	17.5%	戦争の脅威	6	15%
大衆の支持	14	35%	国際的反動	8	20%
経済恐慌	20	50%			
労働運動反対闘争	7	17.5%			
ドイツ共産党の政策	25	62.5%	ドイツの教訓	24	60%
資本主義から生まれたヒットラー	28	70%			
地主及び工業家の支持	30	75%			
社会民主主義の政策	34	85%	労働運動の破産	35	87%
労働運動の分裂	43	107%			
			テロル	278	695%

(1) 頻度

出所 Cf. S. CAAMANO, a. c., p. 152.

(2) 平均頻度と対比した頻度

る多くの注釈や批判が行われた結果であろう。経済恐慌のテーマは、期待された程公表されていない。それは、平均頻度の二二%である。経済恐慌は、共産党員にとって、資本主義の危機の一面面である。別のテーマと関連させれば、このテーマは、最も頻度の高いテーマの一つとなる。労働運動反対闘争も、重要なテーマであり、それは、平均頻度の二五%を占める。一九三三年七月にカーブが上昇しているのは、前述した社会党大会と共産党中央委員会会議が開催され、この問題が議せられたからである。地主及び工業家によって与えられた支持のテーマは、経済恐慌の補足的テーマであり、一九三三年一月には、ヒットラーとパーベンの取引、そして同年七月には、金融の支持が行われたため、グラフの点が高くなっている。一九三四年にこのテーマが更新されているのは、ヒットラー運動とフランスの右翼運動との類推から生じた結果であろう。ヒットラー出現の結果の中で、戦争が脅威的に見えるというテーマは、ヒットラー主義が直接その責任を負っているのではなく、訴えられているのは、帝国主義体系全体である。概して、このテーマのカーブは弱く、平均頻度の一三%を占めるに過ぎない。また、国際的反動は、相対的により小さいテーマとなっている。次に、平均頻度のテーマが取り上げられている。ヒットラー出現の原因の中で、ヒットラー主義と資本主義の間に存在する関係は、相当な頻度を持つテーマであり、それは平均頻度の七九%を占め、二つの補足テーマ、経済恐慌と地主及び工業家の支持とを連結させれば、それはほとんど完全になる頻度である。共産党は、経済条件や資本主義体系の一般的な批判を重視する。一九三四年三月に、このテーマの頻度が再上昇するのは、フランスにおける二月事件の影響を反映しているからであろう。ヴェルサイユ条約の訴追も、重要な地位を占め、それはとくに、ヒットラー出現後の四半期に顕著に見られた。ヒットラーの出現は、同時にフランス帝国主義の批判に刺戟を与えた。しかし、フランス帝国主義の訴追は、一九三三年に減少し、一九三四年には、ヒットラー出現の責任に関する限りでは、ほとんど見られなくなっている。ヒットラー出現の結果の中で、ドイツから引き出すべき教訓は、一定の上昇が認められるテーマであり、フランスの二月事件も大きく作用していることと見ることができる。社会民主主義の破産も、教訓と同じ傾向を持つテーマであるが、一九三三年八月に相方に顕著な違いが見られるのは、国際社会主義者協議会がこの時期に開催されたからであろう。ドイツから引き出すべき教訓の一つは、何よりもドイツ社会民主主義の破産というテーマであった。続いて、最も頻度の高いテーマが取り上げられている。ドイツ労働運動の分裂のテーマは、一九三三年一月はかなり低い頻度であったが、同年二月になるとそのカーブが急に上昇に転じた。このテーマの頻度は、その後かなり高い水準を維持した。フラ

ンスにおける一九三四年二月事件でも、このテーマはその例証として活用され、とくに、一九三四年七月の行動統一協定に先立つ期間談論の中心に位置した。社会民主主義政策の訴追は、最も重要なテーマであり、その頻度は三九〇倍で、はっきり平均頻度を越えて三六九%に達した。一九三三年一月以降、このテーマは、他のテーマよりずっと高い頻度を保った。二つの事件、すなわち、一九三三年八月の社会主義者協議会の開催とフランスにおける一九三四年二月事件が、それを補強した。ところで、このカーブは、ドイツの地位の一般的低下並びにフランスにおける行動統一協定前の社会民主主義に対する批判を和らげる熟慮した政策によって、一定の減少傾向を示した。ドイツにおけるテロルは、最も頻繁に話題に上ったテーマであり、ほとんど毎日、緊急通信として報道された。次に、社会党出版物における色々なテーマについて論及がなされている。先ず、最も頻度の少ないテーマが取り上げられている。ヒットラー出現の原因の中で、フランス帝国主義の政策というテーマは、社会党出版物の中では、少ししか載せられていない。もちろん、社会党出版物は、フランス帝国主義がヒットラー出現に責任があるという立場を取っている。ドイツの社会民主黨員は、しばしばこうした角度から批判を行っている。労働運動反対闘争は、主要テーマとしては現われていない。一九三三年第一四半期を取って見ても、それは平均的な水準でしか見られない。ヒットラーを支持する大衆の役割は、かなり低い水準に留まっている。一九三三年第一四半期に少しカーブが上昇したが、そのままの状態が続いた。経済恐慌のテーマも、最も重要度の低いテーマに数えられている。ヒットラー出現の結果の中で、一九三三年第一四半期を通じて、本質的にヒットラーの危険が注目された。しかし、これらのテーマは、僅かしか見られなかった。次に、平均的頻度のテーマが取り上げられている。ヒットラー出現の原因の中で、ドイツ共産党の政策が、ヒットラー出現の原因として描かれている。一九三三年二月に、その頻度の最高が確認される。このテーマの頻度は、社会党大会等やフランスの一九三四年二月事件によって、一九三四年第三四半期まで上昇するが、その後減退に向かう。資本主義の訴追は、一九三三年第一四半期に一定の高さを保ち、やがて低落する。次いで、一九三三年第四半期に最高水準に達し、一九三四年に入って行動統一協定の締結の数か月前になると再び勢いを盛り返した。地主及び大工業家によって、ヒットラーに与えられた支持は、前のテーマのカーブと同じ線を描き、とくに、ヒットラー出現に続く月にその頻度が増大した。しかし、このテーマも一時性を免かれなかった。ドイツ社会民主政策批判は、とくに社会党「左派」によって行われた行為であり、このテーマの頻度は、当初ゆっくりと増加、一九三三年四月に最初の高みを、次いで同年八月に最高を記録した。それ

は、国際社会主義者協議会が開催された時点であった。ヒットラー出現の結果の中で、ドイツから引き出すべき教訓というテーマは、ヒットラー出現後にはっきりした圧力を受けて取り扱われたが、その後減退していった。労働者政、破産のテーマは、一九三三年四月までずっと増大していったが、それからは零になるまで定期的に減少していった。最後に、最も重要なテーマが取り上げられている。労働運動の分裂は、非常に高い頻度のテーマであり、その後は急速に減少したが、一九三三年七月、八月にテーマの盛り返えしが見られたのは、前述した社会党大会等との関連があったからであろう。このテーマは、ドイツ共産党の政策を追及するテーマのカーブと併行していた。テロルは、全社会党出版物の中で最も重要なテーマであり、ドイツ事件のニュースが、このテーマの重要性を説明していた。一九三四年に、このテーマの頻度が突然低落するのが注目されるが、それは、オーストリア事件がドイツ事件より上位に立ったためであり、その分このテーマの平均頻度が低くなった。カーブの一般的傾向について略述すると、一九三三年第一四半期から第二四半期までのずれ（『ユマニテ』紙にとっては経済恐慌、『ボビュレール』紙にとっては資本主義から生まれたヒトラー）が注目される若干のテーマを除けば、頻度のカーブの全体は、同じような一般的傾向を示している。同年第一四半期を通じて、大半のテーマの頻度の上昇が注目される。両日刊紙とも、ヒットラー出現後は、そこから教訓を引き出すことに没頭する価値のあるテーマを選んだ。第二四半期には、すでにその分析に弛みが生じている。『ユマニテ』紙は、何時でも一定の安定を示したが、『ボビュレール』紙のカーブは、はつきりと低下の傾向を示した。第三四半期には、頻度の低下が鈍っている。それは、社会党第三十回大会の開催や国際社会主義者協議会の会談のために、ドイツが再度想起され、両日刊紙とも多くの報告や注釈を行ったためである。第四四半期に入ると、色々なテーマの減少傾向が示された。ただし、テロルのテーマは除かれねばならない。ところで、フランスにおける二月事件及び行動統一協定の調印に先立つ議論の衝撃でもって、これらのテーマは、一九三四年を通じて再び増大傾向を見せた。次に、共産党出版物及び社会党出版物におけるドイツの地位が検討に付されている。まず、日刊紙が取り上げられている。社会党出版物と共産党出版物の中で、ドイツの占める地位を検討しながら、色々なテーマの一般的傾向を説明することができる。一九三三年度の研究のさい、『フランスの日刊紙』の著者 J. ケイゼル Jacques Kayser の完成した方法を使用する。この方法は、さらに関心のある研究のために単純化された。すなわち、両日刊紙が持つ明白な情報の概念について、その完全かつ組織的な研究を行うのではなくて、他の情報に比べてドイツの事件がどのような地位を占めているかを決定しよう

と試みる事が重要である。それは、この問題についての社共両党の配慮が何であるかを見究めることにもなる。この研究は、見木との照合で行われた。計算の基礎は、各日刊紙の欄とその分けられた部分で行われ、組上げは考慮されていない。『ユマニテ』紙の場合は、規則正しいページ付けを示していない。従って、同紙の場合には、普通のページ付けの号で得られる点数全体と関係ある号で得られる点数全体との関係の商によって得られる結果を増やして、普通のページ付けより低いページ付けを示す号を集めた。こうした研究の結果を四半期ごとにまとめた。その結果、ドイツの地位を具体化するカーブの一般的傾向が、テーマの頻度のカーブの一般的傾向を確認することが判明した。両日刊紙とも、一九三三年第一四半期と第二四半期との間で、ドイツに付与された地位に一寸した上昇が見られ、その低下が第二四半期に始まり、最後の四半期にそれが加速している。ただし、『ユマニテ』紙は、ライプチヒ裁判に対する異常な関心とドイツに重大な地位を保持し続けたため、これから除外される。社会党のテーマと共産党のテーマとを比較するときを生じる第二の確認では、ドイツに与えられた地位は、常に『ユマニテ』紙の方が『ポピュレール』紙より優位に立っていることが判明する。それは、反ファシズム闘争を具体化する欄を比較したときにいっそう強められる。それは恐らく、両日刊紙が持つ情報についての考え方自体から生まれている。色々な事実に関する相当な違いについても注目に値する。すなわち、『ポピュレール』紙は、これら色々な事実について、『ユマニテ』紙のその二倍のスペースを割いている。また、経済及び社会政策に当てられる地位は、そのまた別の例であるが、『ユマニテ』紙が『ポピュレール』紙よりほとんど二倍以上のスペースを割り当てていることが判明する。次に、雑誌が取り上げられている。社共両党は、確かに違った情報概念、同時に政治的概念を持っている。社共両党の内部雑誌を検討してみると、同じような不均衡を発見することができる。例えばドイツに關係する問題でも、はつきりとした不均衡が見られる。共産党機関誌『カイエ・デュ・ボルシェヴィスム(ボルシェヴィスム誌)』『Cahiers du Bolchevisme』の場合、一九三三年に発行した二十号の第十三号、すなわち六五%が、ドイツに関する長文の研究を掲載している。ここでは、ドイツに一寸触れている各種論文は考慮されていない。ところが、社会党雑誌に關しては、これとかなり違っている。社会党の場合、雑誌選択の問題が未解決であり、未発見の雑誌や不完全シリーズの雑誌が多い。週刊誌『ブルタン・ソシアリスト(社会党雑誌)』『Bulletin socialiste』は、一九三三年度分だけ参考照できる。一九三三年度分は、国立図書館に取められている。この社会党出版物では、何時もドイツ事件に特別の考慮が払われていないことを確認することができる。すなわち、かなり短かい

ドイツに関する三つの情報が掲載されているが、それは二十八号中一一％、公表されている情報論文の僅か二％を占めるに過ぎない。次に、週刊誌『ラ・ヴィー・ユニオンシアリスト（社会党生活）』La Vie socialiste は、社会党「右派」の傾向を代表する雑誌で、社会党分裂後は、フランス社会党・ジャン・ジョレス同盟の代表誌の役割を果たした。一九三三年度、四十二号の中十二号、すなわち二八・五％が、ドイツに関する論文情報を公表している。ドイツ問題は、フランス社会党のこの派にとって支配的な考慮の対象ではなかった。全体で五六九論文の中、ドイツの占める比重は極めて低かった。<sup>52</sup> 第三の雑誌『ラ・バタイユニオンシアリスト（社会党の戦い）』La bataille socialiste は、毎月十五日に発行される、フランス社会党「左派」の傾向を代表する雑誌であり、P・F・オール、J・B・マルバラが関係していた。国立図書館に、一九三三年度分が十一号、一九三四年度分が五号取められている。一九三三年度十一号の中三号、すなわち二七・三％がドイツ問題を論じている。八十四論文の中、ドイツ問題の比率は非常に低かった。一九三四年度五号の主要関心事は、社会党政策によって構成されていて、四十四論文中、ドイツ問題の記事は皆無であった。<sup>53</sup> 最後にテーマの重要性についての比較が行われている。社会党出版物におけるドイツ事件は、党内出版物としては、とくに相対的に低い地位を占めている。共産党出版物では、それは、量的な違いを見せており、さらにほとんど全てのテーマに反響を持つテーマとなっている。この違いを別とすれば、両日刊紙のテーマの平均頻度を参照するとき、一定の見解の一致を確認することができる。もちろん、若干のテーマには不一致が見られた。不一致の頻度のテーマから見えていくと、先ず、ドイツ共産党の政策は、『ユマニテ』紙では追及されておらず、他方の『ホビュレール』紙では、二十五の頻度から見ていくと、先ず、ドイツ共産党の政策は、『ユマニテ』紙では追及されておらず、他方の『ホビュレール』紙では、二十五の頻度で、平均頻度の六二・三％で、穏和な方法でドイツ共産党の政策を批判している。共産党の社会民主主義への攻撃は、量的に大きな違いを見せている。頻度は、『ユマニテ』紙が三九〇、『ホビュレール』紙が三十四である。平均頻度と比較した百分率を比較しても、この距離は修正されない。すなわち、『ユマニテ』紙三六八％に対して、『ホビュレール』紙八五％であった。二つのカーブを比較すると、この大きな距離が明示される。共産黨員にとって、社会民主主義批判は、基本的な問題なので、このことが理解できる。ところで、二つのカーブの一般的傾向の中に明白な類似性が注目されるのも奇異な感じである。ウ・エル・カイユ条約の告発とフランス帝国主義の訴追は、共産黨員にとって基本的任務であり、このテーマは、『ユマニテ』紙九十一の頻度を示す。『ホビュレール』紙は、七だけの頻度で、これは同紙にとって、最も頻度の少ないテーマの一つである。平均頻度と比較しての百分率は、それぞれ八六・八％と一七・五％であり、この差

いは単に量的なものではなく、若干異なる一般的政治動向を反映していることを説明する。しかし、共産党出版物で、このテーマの頻度は絶えず低下する。地主及び工業界によって、ヒットラーに与えられた支持は、共産党出版物の中では、最も頻度の少ないテーマの中に分類され、社会党出版物の中では、平均頻度のテーマの中に分類されている。両日刊紙の相違は、左程大きくない。頻度全体は、『ユマニテ』紙三十六、『ポピュレール』紙三十である。平均頻度と比較しての頻度は、それぞれ三四%と七五%である。百分率の距離は、大きい。このテーマは、経済恐慌の訴追の補足テーマであるから、この結果には、多少ニュアンスを付けるべきであらう。これら二つのテーマを合わせると、『ユマニテ』紙二二〇と『ポピュレール』紙五十八の頻度であり、百分率は、一一三%と一四五%が得られる。頻度の距離が極端に増大しても、百分率の距離が減少することが知られる。次に、一致の頻度のテーマを見ると、これが最も数の多いテーマである。最も頻度の少ないテーマについて、先ず、平均頻度の半分以下の頻度のテーマは、比較することによってその違いが示される。先ず、ヒットラー出現の原因の中で、経済恐慌が上げられるが、二つのカーブは、かなり似通った一般的傾向を示し、時間的配分でも、両党の同じ配分に依っている。また、頻度全体もかなり接近している。すなわち、『ユマニテ』紙二十三、『ポピュレール』紙二十である。これに反し、平均頻度と比較した百分率は、『ポピュレール』紙が上位で五〇%、『ユマニテ』紙は二二%である。しかし、これには一定のニュアンスを付ける必要がある。経済恐慌自体と資本主義体系の訴追(補足テーマ)とを合わせると、『ユマニテ』紙一〇七、『ポピュレール』紙四十八(平均頻度の一二〇%)という頻度が得られる。二つのテーマの距離にも当然、濃淡を付けるべきであらう。ヒットラーに大衆がもたらした支持について、両党では違った態度が見られる。共産党員は、とくに中産階級によってもたらされた支持を重視し、社会党員は、労働者階級によって演じられた役割を隠さない。カーブ自体も、かなり違っている。『ポピュレール』紙では、このカーブは規則正しく配分されている。この違いは、平均頻度と比較しての百分率のレヴェルでも見られる。すなわち、『ポピュレール』紙三五%、『ユマニテ』紙一七%である。これは、頻度全体、『ポピュレール』紙の十四、『ユマニテ』紙十八を比較した上での違いである。労働運動、対闘争について、『ユマニテ』紙はこれを大いに活用し、平均頻度の二五%であるのに、『ポピュレール』紙は一七・五%である。これは、全体の頻度のレヴェルでも感じられる違いで、『ユマニテ』紙二六、『ポピュレール』紙七である。ただし、後者の二年間の配分はかなり規則的である。ヒットラー出現の結果の中で、国際的、反動にヒットラーが与えた例は、『ユマニテ』紙十七度、『ポピュレール』紙八度

である。両紙とも、このテーマの地味な意義を強調している。平均頻度と比較しての百分率、『ポピュレール』紙二三%、『ユマニテ』紙一六%を比較することもできる。戦争の脅威は、両紙ともかなり接近した方法で発見できる。『ユマニテ』紙十四度、『ポピュレール』紙六度で、平均頻度と比較しての百分率はどちらも一五%を示している。次に、平均頻度のテーマについて、先ず、ヒットラー出現の原因の中での資本主義の訴追は、両党ともかなり接近した方法で発見され、時間的配分もカーブが示すようになり比較できる。頻度全体では、『ユマニテ』紙でドイツの占めるより大きな地位を証明している。このテーマは、『ユマニテ』紙八十四度、『ポピュレール』紙二十八度で、平均頻度と比較しての百分率は、七九%と七〇%で、かなり接近している。ヒットラー出現の結果の中でのドイツから引き出すべき教訓は、『ユマニテ』紙が六十二度、『ポピュレール』紙が二十四度で、平均頻度と比較しての百分率は、三八%と六二%ではるかに接近している。その百分率は、労働者政党の破産に関しては、大変違っている。共産党員にとって、それは社会民主主義の破産に限定される。このテーマは、『ユマニテ』紙七十度、『ポピュレール』紙三十五度で、平均頻度の七〇%と八七%を占める。最後に、最も頻度の多いテーマについて、ドイツにおけるテロルは、両日刊紙でニュースの材料として活用されている。二つのカーブは、一九三三年を通して似通っているが、一九三四年は同じでない。それは、オーストリア事件が、過分の分け前を取ったからである。このことが、頻度全体の違い、すなわち『ユマニテ』紙四九五、『ポピュレール』紙二七八を説明している。両者の大きな距離は、一九三三年末にはっきりしていた。『ユマニテ』紙は、ライプツヒ裁判に関する多くの報告を載せ、かつドイツで猛威をふるう弾圧を暗示することを忘れなかった。平均頻度と比較しての百分率の比較は、最初の観察では、頻度の数字と矛盾しているように見える。『ユマニテ』紙の四六七%と『ポピュレール』紙の六九五%は、ヒットラー主義のこの側面に両日刊紙が与えた注意力を証明する重要な百分率を示している。この二つの百分率の間にある重要な違いは、『ポピュレール』紙の頻度のカーブと、『ユマニテ』紙の頻度のカーブのより大きな意味との間にある違いを説明し、また、ドイツの諸事件に両日刊紙が与える地位の間にあるもう大きくは無い違いをも説明している。実際、『ポピュレール』紙も、この事件にかなり大きな地位を与えている。同紙は、緊急通信でドイツのニュースを即刻発表するのに貢献している。この緊急通信は、しばしばその弾圧政策を報告し、そこからテロルのテーマの重要性を導き出している。ただし、テーマの低い頻度を未だす解説は伴っていない。労働運動の分裂は、両党によって再追され、かつ相互に責任を問いかけている。『ユマニテ』紙が、カーブではっきり上位を保って



いる。頻度全体の比較では、『ユマニテ』紙が一七〇度、『ポピュレール』紙が四十三度、平均頻度と比較しての百分率の比較では、『ユマニテ』紙が一六一・五%、『ポピュレール』紙一〇七%で、このことは、両党が労働者統一の問題に重要性を付与していたことを示している。とくに、労働者政党的政策の評価に閉じて、両日刊紙の平均頻度と比較しての頻度百分率を比較して見ると、そこに一定の不一致を確認することができる。しかし、テーマ全体は、両党のそれぞれによって、同じ方法で評価されている。とくに、そのことは、最も頻度の多いテーマの中に入る、ドイツ労働運動の分裂のテーマについて言うことができる。色なテーマで見られる頻度では、はっきりと、『ポピュレール』紙と比較して、『ユマニテ』紙が上位を占めていることを確認せざるを得ない。『ユマニテ』紙の読者は、『ポピュレール』紙の読者よりもドイツ問題にいっそう敏感で、少なくとも既成の分析に最も影響を受けていたと論理的に考えることができる。従って、彼らは、機関紙誌読者の中で、労働者統一の問題に極めて敏感であったと確言してもよいであろう。<sup>54</sup>

S・カーマンは、結論の部分で、大要次のように述べている。J・トロース氏は、一九六八年大学資料センターで出版した、国民社会主義に関する集中講義案の中で、ヒットラー出現について歴史家たちが与えた解釈を検討するために一章を捧げている。われわれは、歴史家たちによってなされたこれらの分析の大きな路線を再度取り上げ、その全てが多少とも一九三三年と一九三四年の共産党及び社会党出版物の中で現われているのを発見することができる。ドローズ氏は、一連のテーゼが、ヒットラーの出現を経済レヴェルの理由に、とくに一九三〇年代の恐慌にその根拠を求めていることに注目している。それが、彼らの主要な議論なのであるが、こうした説明を与える歴史家たちは、失業の進行をその証拠として上げ、さらに、彼らは、この失業の進行をドイツ大衆の増大する急進化と関連づけて説明している。われわれは、第二章で見た、社会党出版物及び共産党出版物と全く同様に、ヒットラー出現における経済恐慌の役割を正しく指摘した。経済恐慌は、極めて激しくドイツ大衆を叩き、彼らを悲惨な生活に追いやり、彼らを精神的肉体的に破壊し、こうして国民社会主義のデマゴギーの発展に最適な土壌を作り出した。共産党及び社会党の出版物は、最もヒットラーに服従しやすい大衆が、恐慌によって破壊したブチ・ブルジョア及び農民大衆であると観察した。そのことによって、歴史家たちは、若干の歴史家がヒットラーの出現における経済恐慌の役割にもたらす修正を発見した。ドローズ氏が引用する選挙社会学の諸著作、とくにリブセットのそれは、急進化し、非常に強く頹廃の感情やプロンタリア化の脅威を体験している中産階級の役割を際立たせている。中産階級の役割についてのこの定義

は、社会党にとって相応しいように見えた。レオン・ブルムは、この階級は、恐慌や失業の事実からプロレタリア化され得ないと主張したけれども、彼らが結局、彼らをヒットラーの腕の中に追いやつた。共産黨員は、これに反して、はるかに黙殺的であつた。彼らが、恐慌によって破滅した中産及び農民階級によってヒットラーにもたらされた支持を強調したとしても、彼らは、ヒットラー主義を中産階級の権力と考えることは拒否した。彼らは、ヒットラー主義の中に、本質的に恐慌から脱け出す資本主義のための手段を見た。その責任は、何よりも資本主義に起因していた。ヒットラー主義は、資本主義の単なる手先に過ぎない。若干の歴史家は、恐慌の重荷を人民大衆だけに転嫁し、資本主義の利益を保持するため、労働者と共に共産党組織を破壊する任務をヒットラー主義に帰着させ、この側面を、支配階級の干渉及び共犯として訴え、かつナチズムの出現をこれら支配階級の行動によって強調した。共産党出版物は、われわれが第二章を通して見たように、地主及び工業家によってヒットラーにもたらされた支持の中に、ヒットラーが「資本主義の召使」"valet du capitalisme"であるという事実上の説明を発見した。社会党出版物は、とくにフランス社会党左派に発言権を与えたときに、これと同じ分析を行つた。ヒットラーは、そこでも同じく「資本主義の従僕」"serviteur du capitalisme"と性格づけられた。地主及び工業家の支持もまた、平均頻度と比較してこのテーマの頻度を考慮した場合、『ユマニテ』紙におけるよりも重要な方式で強調されていた。他の歴史家たちは、この金融レヴェルの支持に、支配階級力によってナチスにもたらされた政治的支持を付け加えた。こうしたドイン事件についての見解は、長い間、国民社会主義政党を体系の中に統合し、かくして中立化できる政党と考へる社会主義運動には相応しいように見えた。それは、ヒットラー出現後ずっと、レオン・ブルムらが表明していた意見である。他方、社会黨員は、その政策によってヴァイマル連合を破砕したカトリック中央党の態度を糾弾した。ドイツの歴史家エルドマン Erdmann もまた、ミューラー議会によって定礎された大議會連合の崩壊の中に、また諸政党の分裂の中に、ヴァイマル共和国の失敗の原因を見た。社会主義運動、とくに社会党「左派」は、ドイツ共和国に対してこうした非難を行つた。レオン・ブルム自身、ドイツの社会主義者たちが革命を実行しなかつた点を非難している。共産黨員自身は、ずっと先を進んでいる。彼らは、ドイツの社会主義者たちが革命を実行しなかつただけでなく、それを圧殺したとして非難した。彼らがドイツ社会民主主義に対して行つたのは、最大限の非難であつた。社会主義運動、とくにドイツの社会主義者たちは、帝国主義、とくにフランス帝国主義の政策を追究した。フランス帝国主義は、眞の共和的伝統の発展を妨害しながら、若いヴァイ

マル共和国を支持しなかったとして非難された。そのことを、K. フランツハートもまた、古い帝國時代の諸制度の維持、すなわち、「権威的かつ階級的な国家」と呼ばれているものの維持という視点によって説明している。それによって、彼は、多少共産党員の立場に加担して、ヴァイマル共和国が首尾よく実行したであろう革命の表現まで否認する。共産党員は、もしフランス帝國主義の政策を追及するとしても、社会党員は、とくにその適用の面しか批判しないために、フランス帝國主義を通して一歩にウェルサイユ体系の批判を犯した。これらの政治レヴェルでの理由は、もし労働者政党の政策について語らなければ、決して完全なものではないであろう。社会主義運動が共産主義運動に対して行った「最悪の政策」- "politique du pire" - という批判に対して、共産主義運動は社会民主主義にその全ての罪を負わせ、かつ社会民主主義の改良主義的政策全体を特徴づける表現である「より小さな悪」政策を非難しながらこれに対応した。反ファシズム闘争の連合戦線の実現を阻害したのは、この二つの政策、すなわち一方では「最悪」政策、他方では「より小さな悪」政策であった。両党は、労働者分裂の責任を互いになすり付けた。労働者分裂に対して、両党とも限定を付けることを訴えたが、しかし各党それぞれに違つた条件を付していた。社会党員は、組織統一を希求していた。他方、共産党員は、行動統一について語り、社会党の改良主義的政策の放棄によってしかそれを考えなかつた。この政策が、労働運動をその喪失へと導いた。すなわち、社会民主主義をヒットラーの前に降服するように導いた。ドイツ社会民主主義の破産は、そのことを証明している。社会主義運動は、この破産を確認し、それをさらに共産主義運動にまで拡げる。共産主義運動は、彼らの目から見れば、これ以上ヒットラー主義の高揚に抵抗できなかったし、ドイツでは実際に破滅してしまつた。ヒットラー出現の他の結果の中でも、われわれは、当時ドイツを支配していたテロルが、本質的な地位を占めているのを見た。そこで、われわれは、ドイツの諸事件について、社会党員や共産党員が、テロルの実例をその感覚に帰着させる頻度が高かつたため、両党が真剣に「ドイツから教訓を引き出す」よう誘導されたと見ている。すでに見たように、ドイツの教訓を引き出すというこれらのアピールは、両党のそれぞれにかなりの頻度で見られた。この研究の目的の一つは、ドイツの諸事件から引き出すべき教訓が何であるか、両党がこの点で意見が一致するかどうかを決定することにあつた。他方、顕著な違いが、両党間で考察できた。社会民主主義政策の批判は、たとえそれが社会党出版物でなされた場合でも、このテーマが最も重要な共産党出版物によってなされた非難の豊富さとは比較にならない。われわれは、それを平均頻度の三六八%に等しい頻度で見える。この上昇した百分率は、ドイツの諸事件を通して、

共産党出版物が、社会民主主義を狙っていることをよく示している。労働者の分裂というテーマは、共産党出版物が、社会民主主義の政策に対して行った最大の非難テーマであった。ところで、労働者統一の問題は、両党にとって気懸かりな問題として現われた。社会党員及び共産党員にとって、このテーマは、ヒットラー出現の原因として与えられた。共産党出版物の中で、このテーマは、社会民主主義政策批判の後に来る、重要度で言えば第二番目であることが判っている。社会党出版物の中では、これは、ヒットラー出現の原因として最も重要なテーマであった。平均と比べた百分率は、両者とも、確かに統一の問題に両党が付与した重要性を示す、一〇〇%以上であった。もし、われわれが確定した分類に一致点があるとすれば、このテーマは、両党にとって最も頻度の多いテーマの中にあるので、絶対的な頻度数が重要な違いを際立たせていることを考察しなければならぬ。ドイツにおける労働者分裂のこのテーマは、共産党出版物の中で一七〇度想起された。それは、社会党出版物におけるよりも約四倍も多かった。もし、そのことが、ドイツの諸事件及び社会民主主義に對する批判を説明するため、また資本主義自体の追及及びフッッシュ化するブルジョアシーの追及を説明するため、『ユマニテ』紙がこのテーマに重要な地位を与えていたとすれば、労働者分裂のテーマは、『ユマニテ』紙にとって『ポピュレール』紙よりもはるかに重要なテーマであったことを考察する必要がある。『ユマニテ』紙にとって一六一・五%の百分率は、『ポピュレール』紙に關しては一〇七%が指摘される。従つて、絶対的重要度と相対的重要度における違いが指摘される。そのことは、われわれに、『ユマニテ』紙の読者は、『ポピュレール』紙の読者よりもずっと一般的にはドイツの諸事件と同様、労働者統一の問題に極めて敏感であつたと考えることを可能にする。頻度全体では、『ユマニテ』紙が『ポピュレール』紙の三倍であつた。われわれは、この研究の初めの所で、ドイツの諸事件が、一九三四年七月の行動統一協定の締結で一定の役割を演じたのかどうかを知る問題を提起した。われわれが確定した頻度のカーブは、ドイツの諸事件に与えられた関心の低下、それも一九三三年の第四半期以降に感じられ、かつ一九三四年を通じて強められる低下を記録したことが注目されねばならない。この関心の低下は、『ポピュレール』紙でとくに感じられた。そこでは、ドイツでの弾圧を報告するニュースですら稀となつた。そのニュースは、一九三三年を通じて、ドイツに對てられた論文の主要なものを構成していた。『ユマニテ』紙は、たとえヒットラー出現の原因を余り分析しなかつたとしても、ドイツには重要な地位を与えた。同紙は、ドイツで支配的なテロルを報告し、ライブチヒ裁判のデイミトロンや被疑者のために、次いでテールマンのために熱心な運動を實行した。他の事件、例えば、オーストリア

二事件とフランスにおける一九三四年二月事件が、われわれが検討を加えた十九か月間に生じた。それらの事件が、社会党員と共産党員との間の行動統一協定締結のさいに果たした役割は、疑いもなく無視できない。しかし、われわれの研究の枠組は、それを検討することを許さない。従って、われわれは、これらの事件が一九三四年七月の統一協定調印に与えた相対的重要性について結論を出すことができな  
い。こうした考察にもかかわらず、われわれには、労働者の分裂が、ヒトラー出現の主要な原因の一つとして与えられている限度で、  
そしてそれは、両政党にとっても真相であったが、提起された問題に断定調で答えることができるように思われる。すなわち、ドイツの  
諸事件は、社会党員及び共産党員による一九三四年七月の行動統一協定の調印において一定の役割を演じたということである。<sup>(59)</sup>

(未完)

——一九八〇—四—二十七——

——一九八〇—九—十三加筆——

(1) 拙稿「フランス人民戦線研究の新動向」鹿兒島大学法文学部『法学論集』第十五巻第一号(通巻第二十五号)一九七九年十月三、五四—五五頁、等参照。

(2) Cf. Bulletin du Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme (CRHMSS) (ancienement Bulletin du Centre d'Histoire du Syndicalisme), N° 2, Année Universitaire 1977-1978, Université de Paris I-Panthéon-Sorbonne. (以下「Bulletin N° 2」略記), 282 p.

(3) この五つのメモアールは「Bulletin du Centre d'Histoire du Syndicalisme (CHS), N° 1, Année Universitaire 1976-1977, p. 24.」に掲載されている。Ch. BLANC, Santiago CAAMANO, Françoise CAHIER, Emmanuel CHAUDEURGE 及び Anne-Marie CHERES のメモアールである。これらのメモアールの複写については CRHMSS 幹事の J. ジロー氏の好意により、日本学術振興会から共同研究のため帯広中の木学教養部の石沢良昭氏のお手を煩わした。ここに深謝の意を表明しておきたい。本稿では、紙数の制約のために、前二編のメモアールについてしか叙述することができなかった。後三編のメモアールについては、統稿で詳しく紹介する予定にしている。

- (4) 拙著『フランス人民戦線論史序説』法律文化社 一九七七年二〇八、二一九―三〇〇頁等参照。前稿記載以後における拙稿の紹介及びコメントについては、マルクス主義研究セミナー芝田進年賀任編集『マルクス主義研究年報第二号―一九七八年版』合同出版 二五七頁、日本政治学会編『年報政治学一九七八年』岩波書店 一九八〇年 一九一頁、国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状 V』東大出版会 一九八〇年 四六五頁、河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』岩波書店 一九八〇年 十九頁参照。
- (5) 「一九七八年の歴史学界―回顧と展望―」『史学雑誌』第八十八編第五号 所収の山極潔、木下賢一両氏の論稿、とくに、三四四、三五六―三五七頁参照。
- (6) 同誌 三五六頁。
- (7) 拙稿 前掲論文 十九頁以下参照。
- (8) Cf. Bulletin N° 2, pp. 3-9.
- (9) Cf. Ibid., pp. 11-13.
- (10) Cf. Ibid., pp. 15-25.
- (11) Cf. Ibid., pp. 26-31.
- (12) Cf. Ibid., pp. 32-34.
- (13) Cf. Ibid., pp. 35-47.
- (14) Cf. Ibid., pp. 49, 64, 52, 57, 59, 60, 63.
- (15) Cf. Ibid., pp. 67-96, 98-107, 109-111, 113-115, 117-123.
- (16) Cf. Ibid., pp. 128, 132-133, 137, 140, 143.
- (17) Cf. Ibid., pp. 145-231.
- (18) Cf. Ch. BLANC: Le Parti communiste et l'unité de la gauche à travers l'*Emancipateur*, hebdomadaire du centre de la France (1930-1936), (Mémoire CHS), 142 p.
- (19) Cf. Ibid., p. 3.
- (20) Cf. Ibid., p. 6.
- (21) Cf. Ibid., pp. 10-11.

- (22) Cf. Maurice Thorez, *Fils du peuple*, ES, Paris, 1970, p. 74. 邦訳 モリス・トレーズ著北原道彦訳『人民の子』(改訂新版)大月書店 一九七八年 五五頁参照。この邦訳では、もう少し直截的な訳出が望まれる。この訳書の紹介については、『歴史学研究』四七七号 一九八〇年二月 七〇頁参照。
- (23) Cf. Ch. Blanc, a. c., pp. 13-14.
- (24) Cf. *Ibid.*, p. 21.
- (25) Cf. *Ibid.*, p. 33.
- (26) Cf. *Ibid.*, p. 37.
- (27) Cf. *Ibid.*, pp. 47-48.
- (28) この三選挙区は、シニョール県のブルジマ第二選挙区、サン・ブマン Saint Amand 選挙区とブリエ県のラ・パリス La Palisse 選挙区であった。Cf. Ch. Blanc, a. c., p. 54.
- (29) Cf. *Ibid.*, p. 60.
- (30) Cf. *Ibid.*, pp. 63-65.
- (31) Cf. *Ibid.*, pp. 74-75.
- (32) Cf. *Ibid.*, pp. 81-82.
- (33) Cf. *Ibid.*, p. 86.
- (34) Cf. *Ibid.*, p. 89.
- (35) Cf. *Ibid.*, pp. 92-93.
- (36) 一立方メートルで一〇〇フランの大木価格は、小売値で二九〇フランと評価され、その取り分は、地主一〇〇フラン、木材商人九七フラン、輸送料五八フラン、雑費(保管料等)二五フランで、労働者の分は僅か一〇フランであった。Cf. Ch. Blanc, a. c., pp. 96-97.
- (37) Cf. *Ibid.*, pp. 103-104.
- (38) Cf. *Ibid.*, p. 105.
- (39) Cf. *Ibid.*, p. 106.
- (40) Cf. *Ibid.*, pp. 119 et suiv.

- (41) Cf. *Ibid.*, pp. 136-140.
- (42) Cf. Santiago CAAMANO: Les causes et les conséquences de l'avènement d'Hitler à travers la presse communiste et la presse socialiste (Janvier 1933-juillet 1934), (Mémoire, Vence), pp. 1-6. 本稿は、本文一八五頁付 属图表、年表、参考文献及びグラフ等六十五頁から成っている。
- (43) Cf. *Ibid.*, pp. 17-18.
- (44) Cf. *Ibid.*, p. 21.
- (45) Cf. *Ibid.*, pp. 41-42.
- (46) Cf. *Ibid.*, p. 61.
- (47) Cf. *Ibid.*, pp. 80-81.
- (48) Cf. *Ibid.*, pp. 87-88.
- (49) Cf. *Ibid.*, p. 130.
- (50) Cf. *Ibid.*, pp. 150-151.
- (51) Cf. *Ibid.*, p. 156.
- (52) 五六九論文の内訳は、原理と社会党の行動、党生活三〇五(五三・六%)、統一・フランス共産党二十一(三・七%)、組合生活一経済社会政策二十六(四・六%)、国内政策四十四(七・七%)、国際社会党生活四十五(七・九%)、ドイツ+組合政策二十(三・五%)、他の国々三十一(五・六%)、国際連盟十一(一・九%)、国際組合政策十二(二・一%)、その他六十八(一一・〇%)である。Cf. S. Caamano, a. c., p. 168.
- (53) 八十四論文の内訳は、(1) 党生活+社会党政策六十四(七六・六%)、(2) 対外政策四(四・八%)、(3) ドイツ三(三・六%)、(4) 国内政策(四・八%)、(5) その他九(一〇・七%)であり、四十四論文の内訳は、党生活+社会党政策三十六(八一%)、対外政策一(二・五%)、フランス共産党との関係二(四・五%)、ドイツ〇(〇%)、その他五(一一%)であった。Cf. *Ibid.*, pp. 169-170.
- (54) Cf. *Ibid.*, p. 177.
- (55) Cf. *Ibid.*, pp. 178-185.



付記一 拙著刊行以後に発行された内外の主要参考文献は、後に一五〇種近くを数えるが、その主なものは、『法学論集』第十三巻第一号(一九七八年)、同第十四巻第一号(一九七八年)及び同第十五巻第一号(一九七九年)に掲載した拙稿の注記の箇所それぞれ紹介したが、それ以降の分については略記すれば、次の通りである。

Jean Burles, *Le parti communiste dans la société française*, Editions Sociales, Paris, 1979.

Yves Person, *Le Front populaire au Sénégal (mai 1936-octobre 1938)*: in *Le Mouvement Social*, numéro 107, avril-juin 1979, Paris, 1979.

Serge Wolikow, *Les rapports du P.C.F. et de l'Internationale communiste (1925-1935)*-(Première partie: Remarques méthodologiques et théoriques.): in *Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez*, N° 25-26, 1978.

Serge Wolikow, *Les rapports du P.C.F. et de l'Internationale communiste*, Deuxième partie, L'orientation "classe contre classe" 1927-1928: Le processus complexe de son élaboration et de sa mise en oeuvre, in: *Cahiers d'histoire de l'Institut Maurice Thorez*, N° 27 spécial, 1978.

Thierry Buron-Pascal Gauchon, *Les fascismes*, PUF, Paris, 1979.

Roger Bourderon, *Le fascisme, idéologie et pratiques (essai d'analyse comparée)*, Editions Sociales, Paris, 1979.

Etienne Fajon, *abc des communistes*, Editions Sociales, Paris, 1979.

André Rosset, *Été 36, 100 jours du Front populaire*, Editions de la Courtille, 1976.

Pierre Frank, *Histoire de l'Internationale communiste (1919-1943)*, Tome I, II, Editions la Brèche, 1979.

加藤哲郎「コミンテルンの綱領問題(一)(二)(三)(四)・完―世界政党のイデオロギー的統合―」名古屋大学『法政論集』第八十、八十一、八十二、八十三号 一九七九年、一九八〇年。

J・P・ベルナル、杉村昌昭訳『フランス共産党と作家・知識人 一九二〇―三〇年代の政治と文学』拓植書房 一九七九年。

田中治男「ファシズム期におけるフランスの右翼―Ch・モーラスとアクション・フランセーズを中心に―」東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』7 運動と抵抗 中 東京大学出版会 一九七九年。

村田陽一編訳『コミンテルン資料集』第二巻 大月書店 一九七九年。

社会問題資料研究会編『コミンテルン第七回大会に於ける報告演説、討論並に決議』東洋文化社 一九七七年。  
山口定『ファシズム』有斐閣 一九七九年。

「特集 ファシズム」『歴史公論』二月号 一九八〇年、とくに、北原、加藤論文。

「特集 社会史」『思想』六六三号 一九七九年九月、とくに、△鼎談▽「社会史」を考える(柴田、遅塚、二宮)等。

「特集 戦後社会主義の転換点(Ⅰ)」『歴史学研究』四七七号 一九八〇年二月、とくに、中西、重岡、小杉論文等。

森本哲郎「フランス共産党史研究序説(Ⅰ)——理論的枠組の形成のために——」京都大学法学会『法学論叢』第一〇六卷第三号、第五号 一九七九年十二月、一九八〇年二月。

東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』8 運動と抵抗 下 東大出版会 一九八〇年、とくに、下村、和田、北原論文。

J・J・L・ソベニーヤ編著『スペイン人民戦線資料』法政大学出版局 一九八〇年。

浜内謙『スターリン政治体制の成立第三部——上からの革命(その一)——』岩波書店 一九八〇年。

野地孝一「フランス人民戦線の崩壊——左翼議会連合の運命と政党体系の特質——」『思想』六七三号 岩波書店 一九八〇年七月。

河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』岩波書店 一九八〇年。

付記二 本年(一九八〇年)四月上旬、社会運動及び労働組合運動史研究所雑誌第三号 一九七八—一九七九年度大学年度 Bulletin du Centre de Recherches d'Histoire des Mouvements Sociaux et du Syndicalisme (C.R.H.M.S.S.), N° 3, Année Universitaire 1978-1979, Université de Paris I-Panthéon-Sorbonne が、筆者の研究室宛てに送られてきた。本誌は、タイプ印刷による二五〇頁に上るB5版である。目次は、同研究所理事會報告、一九七八—一九七九年度活動報告、財政報告、修士号論文論題、セミナー(深化教育課程修了証及び修士号)、労働運動史研究所国際協会 I・A・L・H・Iへの参加、ソ連邦科学アカデミー国際労働運動研究所科学協議会、リント第十四回国際協議会(J・L・ロベールの報告)、「フランス共産党と婦人問題 一九二〇—一九三九年」、マドリッド討論集會(J・シローの報告「スペイン到着のさいのラファアルグの政治的経験」、同研究所提出の修士号及び博士号論文リスト、労働運動に関する修士号、修了証及び論文リスト、同研究所に提出された文書の日録「クレマンドー基金、モンルーージュ計量器会社基金、労働組合文書、労働総同盟煙草マッチ連盟の目録、フランス民主労働同盟文書、国民教育連盟資料連盟センター、同研究所寄贈定期刊行物から成っている。本誌の内容のコメントについては、次号に掲載予定の拙稿「反ファシズム論の研究視点について——フランスのケースを中心として——」(仮題)の中で取り扱かう予定である。

本稿は、昭和五十五年度文部省科学研究費補助金一般研究(D)「フランス人民戦線の地方史的研究」に基づく研究成果の一部である。